

このような特徴をもっているから、子どもたちもまた指摘したような特徴をもってしまったのではないだろうか。子どもたちに「勉強しなさい」と口でいうのはたやすい。しかし、おとなたちは、勉強することやその結果のすばらしい社会を身をもって示していないので

はないだろうか。おとなが身をもって示さなければ、子どもたちはついてきてくれない。なぜ学ぶのか、その結果どんなすばらしいことが待っているのか、子どもたちが思い描きやすい見本となるような社会をおとなたち自身がまず築きあげていく必要があるだろう。

第 2 章

中学生の学習に関する 意識・実態

- 邵 勤風 (1 節 1 項)
- 鈴木 尚子 (1 節 2・3 項)
- 宮本 幸子 (1 節 2 項、2 節 6 項)
- 木村 治生 (1 節 4 項)
- 十河 直幸 (2 節 1 項)
- 西島 央 (2 節 2・3・7 項)
- 諸田 裕子 (2 節 4・5 項)



中学生の学習行動

1. 学校での学習の様子

① 好きな教科

「数学」「理科」は第3回より「好き」の回答比率が増加し、第2回の水準に戻り、理数系科目が好きな中学生が増えている。性別でみると、男子は「理科」「数学」「体育」が好きで、「国語」が苦手であるのに対して、女子は「音楽」「美術」「国語」が好きで、理数系科目が苦手なようである。

Q | あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか。

中学生に教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きなのかをたずねてみた。図2-1-1は第1回からの時系列変化をグラフにしたものである。

まず、国語・社会・数学・理科・英語の5教科における、「好き」(「とても好き」+「まあ好き」の%)、以下同)の回答比率をみてみよう。「数学」は第3回の39.4%より5.6ポイント増加し、45.0%となっており、第2回の水準に戻っている。「理科」でも「数学」と同様の傾向がみられた。「理科」は第3回の46.8%より6.3ポイント増加し、53.1%となっており、第2回の水準に戻っている。理数系科目が好きな中学生が増えているといえる。

「社会」については、「好き」の回答比率が第1回では49.2%だったが、第2回では42.1%と、7.1ポイント減少していた。その後、今回までずっと横ばいである。「英語」については、第1回の38.1%から第2回の43.3%へといったん増加したものの、今回は39.4%と、微減している。

今回、「英語」は全教科のうち、「好き」の

回答比率がもっとも低い。逆に、「嫌い」(「とても嫌い」+「まあ嫌い」の%)の回答比率は全教科の中でもっとも高い。ここでは図表は省略するが、「英語」に対して、「嫌い」と回答した比率は30.5%となっている。「英語」を教科として学びはじめるのは中学1年生からではあるが、現在、小学校段階でも、「総合的な学習の時間」などで、何らかのかたちで英語と接触する子どもが多くなっている。たとえば小学校での英語学習の経験をうまく中学校での学習につなげる工夫をすることで、「英語」を「嫌い」とする回答がもう少し減少する可能性も考えられるのではないだろうか。

実技教科は第3回と比べて、あまり変化がみられなかった。中学生がもっとも好きな教科は、16年間変わらず「体育」(第4回67.1%)である。第3回からたずねている「総合的な学習の時間」はこの5年間、横ばいである。

それでは、性別によって、教科の好き嫌いには差があるのだろうか。図2-1-2は性別にみた結果である。

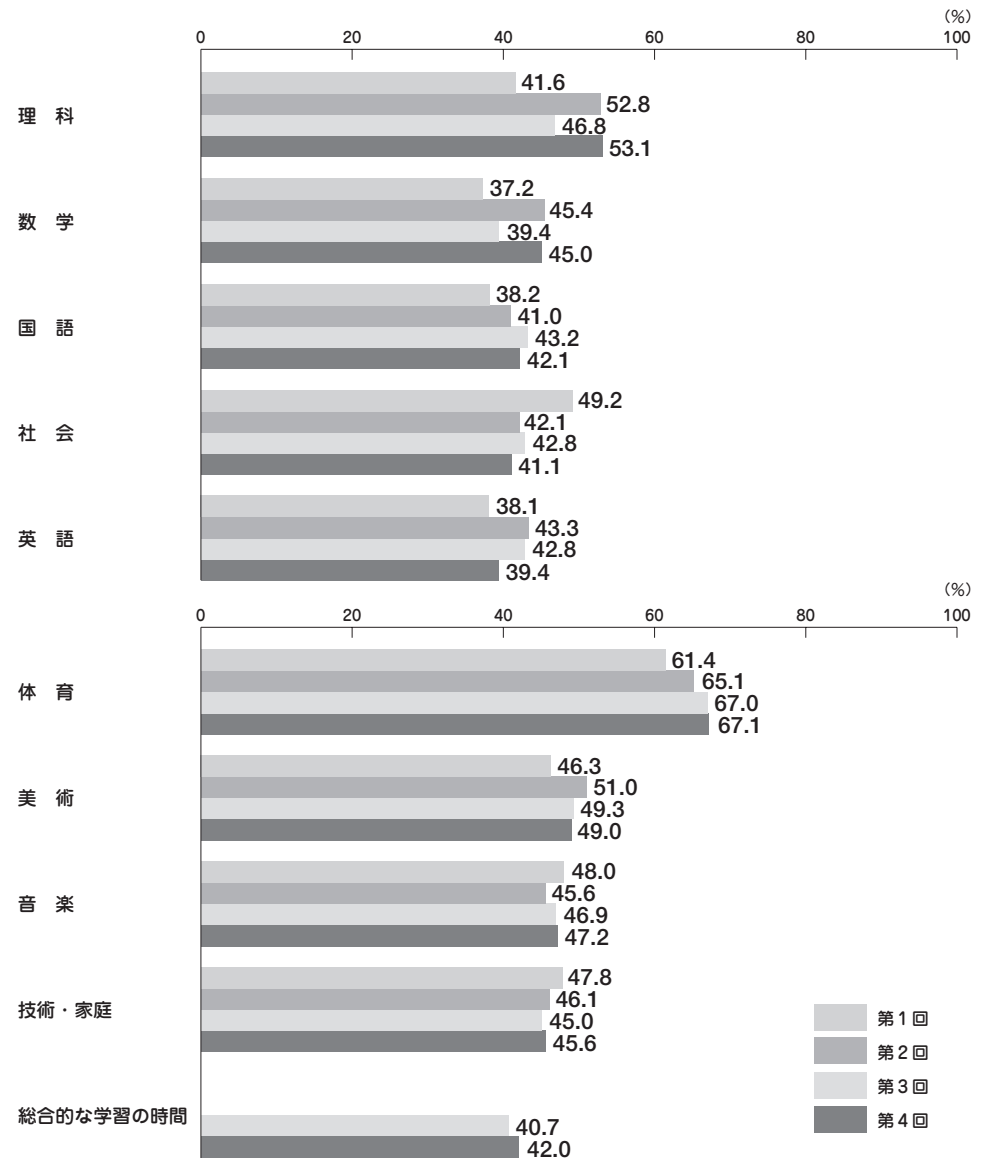
男子のほうが好きな教科(「好き」の回答

比率が女子より10ポイント以上高いもの)は、「理科」(男子62.8%>女子43.1%、19.7ポイント差、以下同)、「数学」(51.6%>37.9%、13.7ポイント差)、「社会」(47.1%>34.6%、12.5ポイント差)、「体育」(72.7%>61.3%、11.4ポイント差)である。一方で、女子のほうが好きな教科は、「音楽」(女子63.0%>男

子32.2%、30.8ポイント差、以下同)、「美術」(57.1%>41.5%、15.6ポイント差)、「国語」(50.0%>34.7%、15.3ポイント差)である。

男子は理数系科目や「体育」が好き一方、「国語」が苦手なようである。それに対して、女子は「国語」や芸術系科目が好きな一方、理数系科目が苦手なようである。

図2-1-1 好きな教科(時系列)

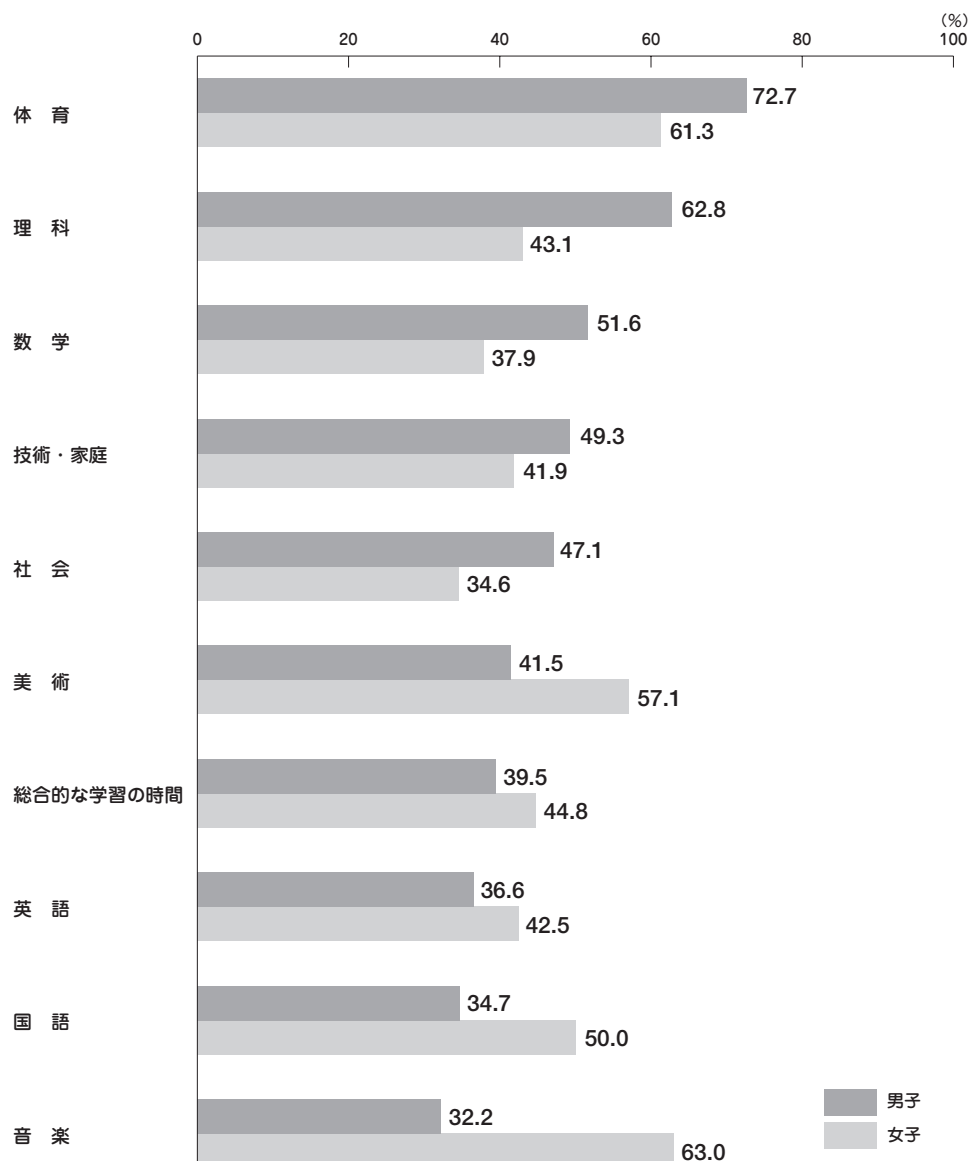


注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。

注2) 第3回の「総合的な学習の時間」は「履修したことがない」を除いて集計している。サンプル数は2,368名。また、第1回・第2回は該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-2 好きな教科(性別)



注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。

注2) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。

② 授業の理解度

「英語」「社会」の理解度は4割程度にとどまっているのに対して、「数学」「国語」「理科」は5割を超えている。また、「数学」「理科」の理解度が第1回から大幅に上昇している。

Q | 学校の授業をどのくらい理解していますか(わかっていますか)。

国語・社会・数学・理科・英語の5教科の授業について、どのくらい理解しているのか、中学生の自己評価をたずねた(図2-1-3)。第4回では、5教科のうち、「数学」「国語」「理科」では授業内容を70%以上理解している中学生の割合(以下、「理解度」と示す)が5割を超えているのに対して、「英語」と「社会」は4割程度にとどまっている。理解度が高最も高いのは「数学」の57.5%で、最も低いのは「社会」の42.1%である。

時系列でみると、「社会」がほとんど変化がみられなかったのに対して、それ以外の4教科の理解度は第1回と比べて、増加していることがわかった。10ポイント以上増加しているのは「理科」(第1回41.1%→第4回52.3%、11.2ポイント増、以下同)、「数学」(46.4%→57.5%、11.1ポイント増)である。

次に、性別に授業の理解度をみてもみた(図2-1-4)。「国語」のみ、女子のほうで理解度が高い(男子49.7%<女子56.1%、6.4ポイント差)。「英語」は性別による差がみられなかった。それ以外の3教科では、男子が女子より理解度が高い。両者の間には、10ポイント以上の差が開いている。たとえば、「理科」は、男子59.8%>女子44.6%で15.2ポイントの差、「数学」は、男子64.8%>女子50.3%で14.5ポイントの差がある。「①好きな教科」(p.27)で述べた、女子が理数系科目が苦手という結果と関連があると考えられる。

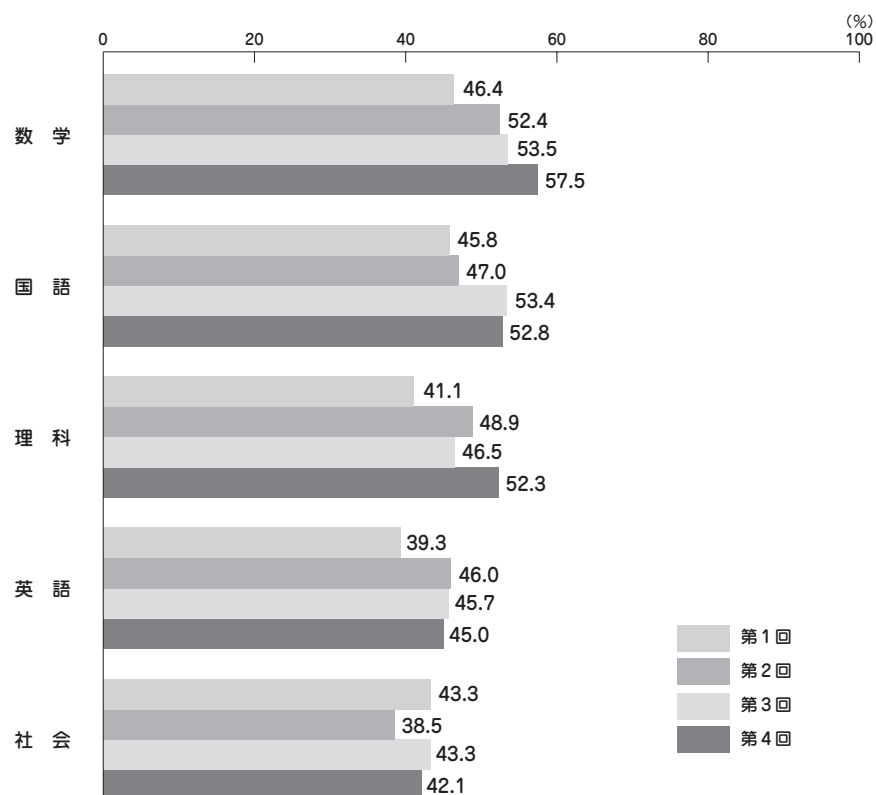
「①好きな教科」(p.26~28)においては、理数系科目が好きな中学生が増えたことも確認した。それに加え、ここでは理数系科目の

授業の理解度が増加している結果がみられた。それでは、授業の理解度と教科の好き嫌いには何か関連があるのだろうか。表2-1-1は5教科の授業の理解度別にみた、その教科が好きな比率である。

予想される結果ではあるが、授業が「わかっている」(「ほとんどわかっている」+「70%くらいわかっている」の%、以下同)と回答している中学生のほうが、その教科が「好き」(「とても好き」+「まあ好き」の%、以下同)な比率が高い。授業が「わからない」(「半分くらいわかっている」+「30%くらいわかっている」+「ほとんどわかっていない」の%、以下同)と回答している中学生より、30~50ポイントほども高い。たとえば、「数学」が「わかっている」中学生のうち、67.4%が「数学」が「好き」と回答している。一方、「わからない」中学生のうち、「数学」が「好き」と回答する比率はわずか15.0%しかない。「英語」も同様である。「わかっている」中学生のうち、67.4%が「英語」が「好き」と回答しているのに対して、「わからない」中学生は16.7%にとどまっている。

好きな教科だからこそ、「知りたい」「わかりたい」「学習したい」という気持ちになり、学習意欲につながると思われる。もちろん、教科の好き嫌いとは授業の理解度との関係は一方的なものではなく、授業を理解することが今度はまた教科が好きになる重要な要素にもなるだろう。生徒が教科が好きになるような工夫、授業の理解度を向上させる工夫が求められる。

図2-1-3 授業の理解度(時系列)



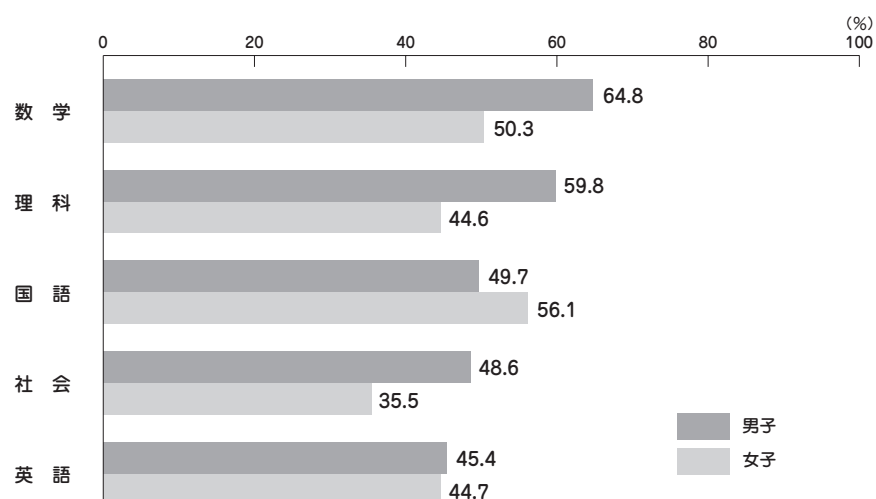
注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計。
 注2) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

表2-1-1 教科が好きな比率(授業の理解度別)

科目	理解度	サンプル数(名)		教科が好きな比率(%)	
		わかっている	わからない	わかっている	わからない
国語	わかっている	1,250		56.8	
	わからない		1,086		26.5
社会	わかっている	998		67.5	
	わからない		1,337		22.3
数学	わかっている	1,365		67.4	
	わからない		967		15.0
理科	わかっている	1,240		77.3	
	わからない		1,089		27.0
英語	わかっている	1,066		67.4	
	わからない		1,268		16.7

注1) 各教科とも「わかっている」は、「ほとんどわかっている」「70%くらいわかっている」と回答した人。「わからない」は、「半分くらいわかっている」「30%くらいわかっている」「ほとんどわかっていない」と回答した人。
 注2) 「教科が好きな比率」は、「とても好き」と「まあ好き」の合計。

図2-1-4 授業の理解度(性別)



注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計。
 注2) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。

③ 授業の受け方

「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」は第1回から第4回の16年間で一貫して増加している。また「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」も第3回でいったん減少したものの、今回は再び増加し、第2回の水準に戻っている。一方、授業に集中していないとみられる逸脱行為が減った。全体的には、中学生の学習態度がまじめになったといえる。

Q | あなたの授業中の様子についてうかがいます。

中学生は学校でどのように授業を受けているのだろうか。授業中の様子について、11項目にわたってたずねてみた。図2-1-5はその時系列変化を表している。この図から以下の2つのことがわかる。

1つめは、学習態度がまじめになったことである。「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(「よくある」+「時々ある」)の比率は、16年間で一貫して増加している(第1回48.2%→第4回56.8%)。「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」は、第1回から第2回にかけていったん10ポイント程度増加したものの、第3回で減少し、第4回は再び35.4%まで増加し、第2回の水準に戻っている。

2つめは、授業に集中していないとみられる逸脱行為が減ったことである。「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」の比率は、第1回では42.3%だったのに対して、第4回では25.7%と、16.6ポイントの減少となる。「ぼうっと他のことを考えている」も、第1回の62.4%と比べて、第4回では7.1ポイント減少し55.3%である。「近くの人とおしゃべりする」では第1回から第2回にかけて約10ポイント減少し、それ以降第4回まで6割の水準が続き、少なくとも増加傾向はみられない。

このように全体的にみると、中学生がまじめに授業を受けている様子うかがえる。

つづいて、性別による差があるかをみてみ

よう。図2-1-6をみると、男子の回答比率が高いのは「授業の内容が簡単すぎると思う」(男子27.6%>女子13.3%、14.3ポイント差、以下同)、「授業中にいねむりをする」(35.0%>26.6%、8.4ポイント差)である。

女子の回答比率が明らかに高いのは「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(男子45.8%<女子68.5%、22.7ポイント差、以下同)、「授業の内容が難しいと思う」(56.6%<74.5%、17.9ポイント差)、「ぼうっと他のことを考えている」(50.3%<60.7%、10.4ポイント差)である。こうしてみると、女子のほうが先生の話聞き、まじめにノートをとる習慣が身についているといえよう。その一方で、授業の難易度に違和感を感じながら授業を受けたりする特徴も見受けられた。

それでは、成績の自己評価別にみた際に、何か特徴があるのだろうか。表2-1-2をみると、授業中の様子では、成績の自己評価による差が大きいことが明らかである。

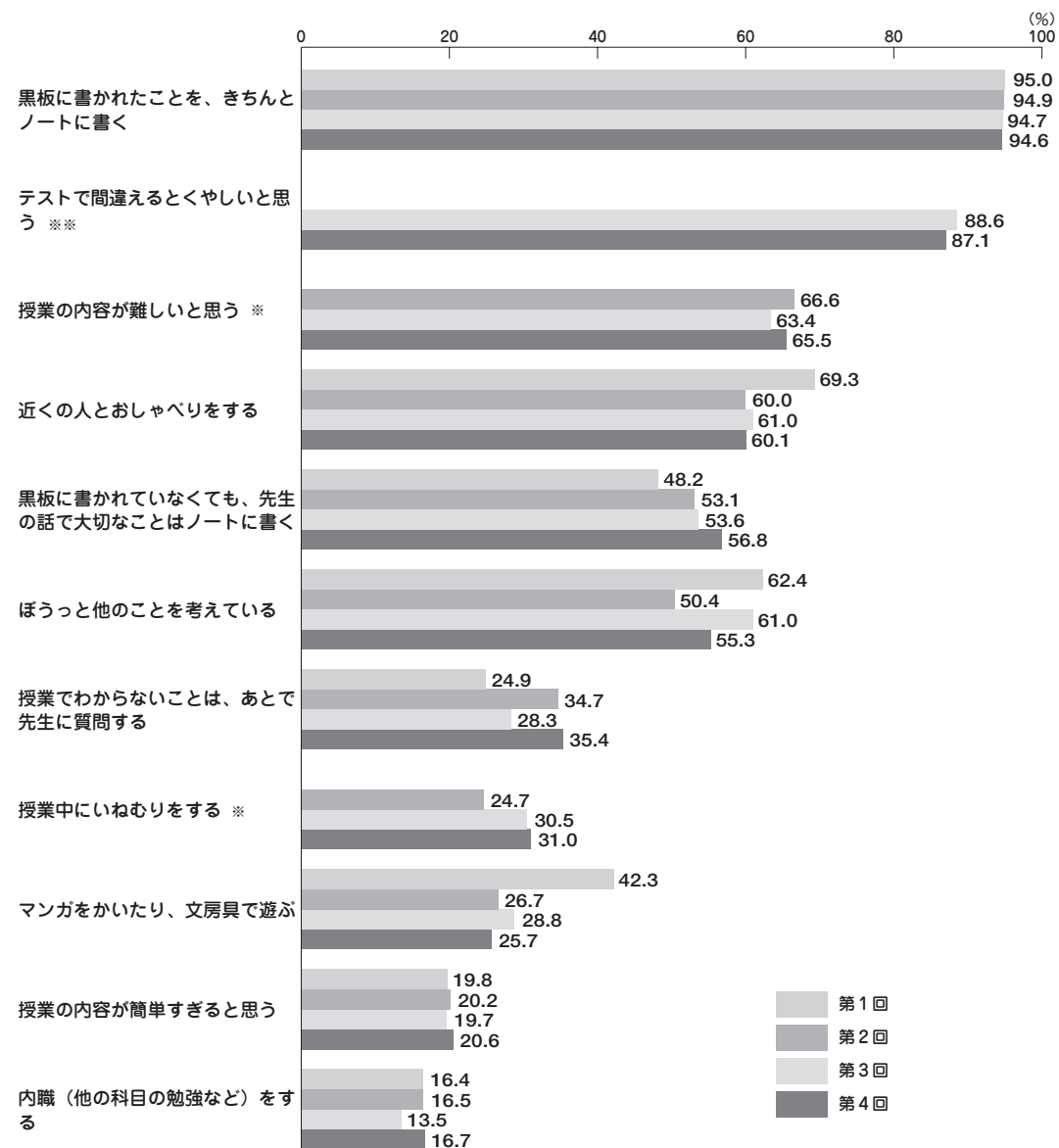
上位層の回答比率が高く、かつ下位層との差が大きいのは、「授業の内容が簡単すぎると思う」(上位34.5%>下位10.0%、24.5ポイント差、以下同)、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」(43.7%>26.6%、17.1ポイント差)などである。

一方、下位層の回答比率が高く、かつ上位層との差が大きいのは「授業の内容が難しいと思う」(上位44.8%<下位80.9%、36.1ポイント差、以下同)、「授業中にいねむりをする」(22.0%<38.3%、16.3ポイント差)、「ぼうっ

と他のことを考えている」(49.4%<62.3%、12.9ポイント差)などである。

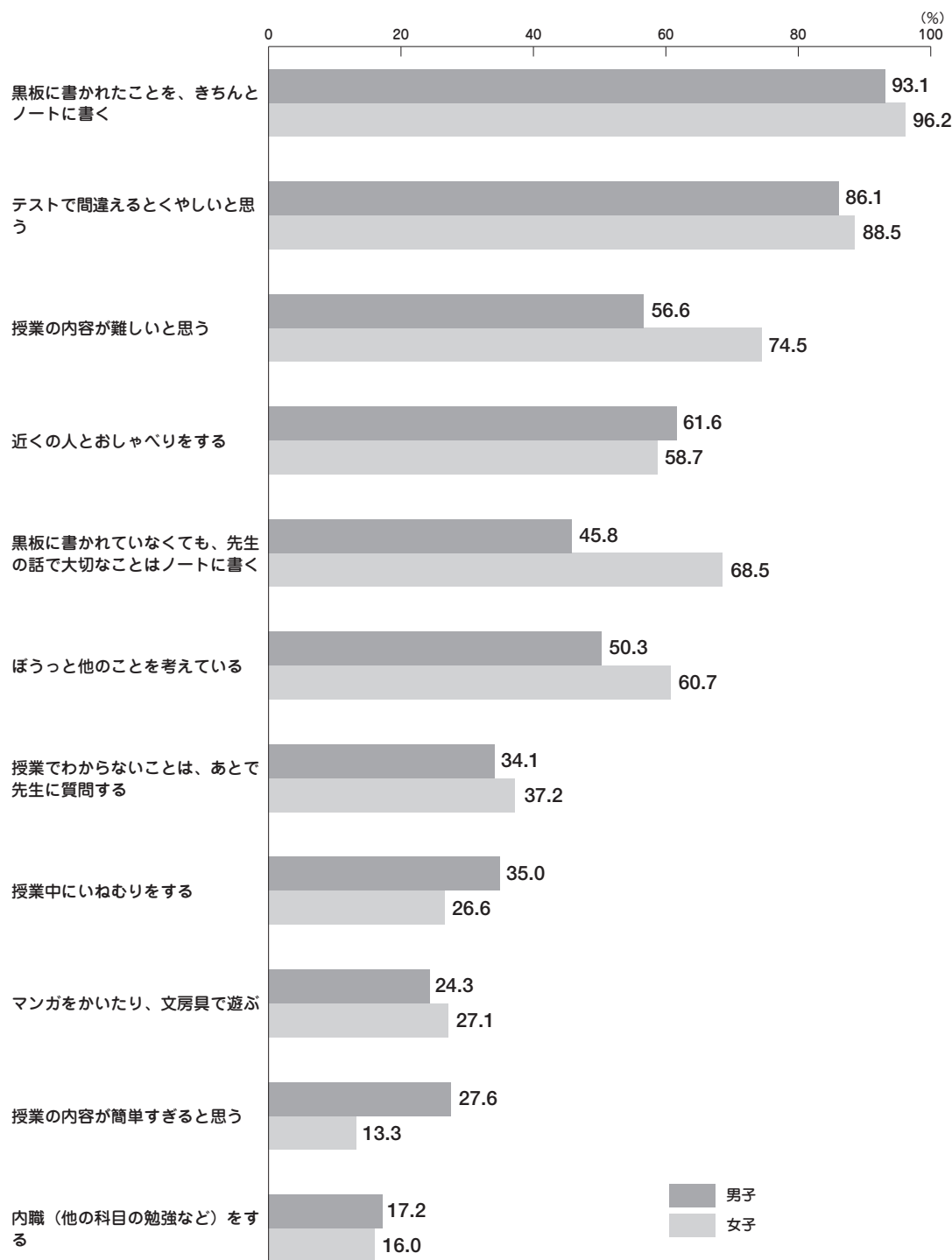
上位層がまじめに授業を受けているのに対して、下位層は授業の内容についていけず、授業に集中できていない様子うかがえる。

図2-1-5 授業の受け方(時系列)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
 注2) ※は第1回に該当項目なし。※※は第1回・第2回に該当項目なし。
 注3) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-6 授業の受け方(性別)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
 注2) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。

表2-1-2 授業の受け方(全体・成績の自己評価別)

	全体 (2,371)	上位 (828)	中位 (475)	下位 (1,006)
黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く	94.6	98.3	96.0	90.7
テストで間違えるとくやしいと思う	87.1	95.4	91.4	78.4
授業の内容が難しいと思う	65.5	44.8	67.4	80.9
近くの人とおしゃべりをする	60.1	56.4	58.8	64.0
黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く	56.8	67.6	60.5	46.7
ぼうっと他のことを考えている	55.3	49.4	51.1	62.3
授業でわからないことは、あとで先生に質問する	35.4	43.7	41.5	26.6
授業中にいねむりをする	31.0	22.0	31.2	38.3
マンガをかいたり、文房具で遊ぶ	25.7	21.7	24.0	29.8
授業の内容が簡単すぎると思う	20.6	34.5	19.2	10.0
内職(他の科目の勉強など)をする	16.7	15.1	17.7	17.9

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
 注2) 成績の自己評価別での最大値に○をつけた。
 注3) ()内はサンプル数。

④ 好きな学校の勉強方法

伝統的な勉強方法と思われる「ドリルやプリントを使ってする授業」の回答比率が増加している。また、自ら主体的に学ぶといった新しい勉強方法については、増加している項目もある一方、減少傾向にある項目もある。

Q | あなたは、次にあげる学校の勉強方法は、どのくらい好きですか。

学校の勉強方法について、どのくらい好きかをたずねた。この質問は第3回から追加したもので、第3回から第4回の5年間の変化を図2-1-7にした。

まず黒板やドリル・プリントを使用するといった伝統的な勉強方法をみてみよう。第4回で「好き」(「とても好き」+「好き」の%、以下同)の回答比率が増加しているのは、「ドリルやプリントを使ってする授業」(第3回43.5%→第4回49.0%、5.5ポイント増)である。学習内容の定着を図るためのドリルやプリントが増え、約半数の中学生がそうした授業を「好き」と評価していることになる。

次に、自ら主体的に学ぶといった新しい勉強方法についてみてみよう。第4回で「好き」の回答比率が増加しているのは「パソコンを使ってする勉強」(第3回74.3%→第4回79.6%、5.3ポイント増、以下同)、「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」(41.5%→46.8%、5.3ポイント増)などである。

しかし一方、同じ新しい勉強方法でも、第3回から回答比率が若干減少している項目もある。たとえば、「いろいろな人に聞きに行っている授業や調査」「学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査」「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」などである。

このように、新しい勉強方法でも、比率の変化に違いがある。パソコンについては、小学校の段階でかなり慣れ親しんで、「パソコンを使ってする勉強」が好きなのは容易に想

像できる。それ以外の項目については、「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」という勉強方法に慣れてきてはいるが、自分で決めたテーマなどについて、学校の外に行き、いろいろな人の話を聞いたり、聞いた話や調べたことをまとめて、うまく人に伝えるという表現力がまだ身につけておらず、苦手であるように思われる。

つづいて、好きな学校の勉強方法には性別による差があるのかをみてみよう(図2-1-8)。性別で5ポイント以上の差がみられた項目は、「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」(男子72.9%<女子80.1%、7.2ポイント差、以下同)、「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」(44.3%<49.5%、5.2ポイント差)である。いずれも女子のほうが「好き」の回答比率が高い。この2つでは女子が多いが、それ以外では目立った差はみられない。

成績の自己評価によって、学校の勉強方法の好みが変わるのだろうか。表2-1-3は成績の自己評価別にみた好きな学校の勉強方法である。以下の2つの特徴がみられた。

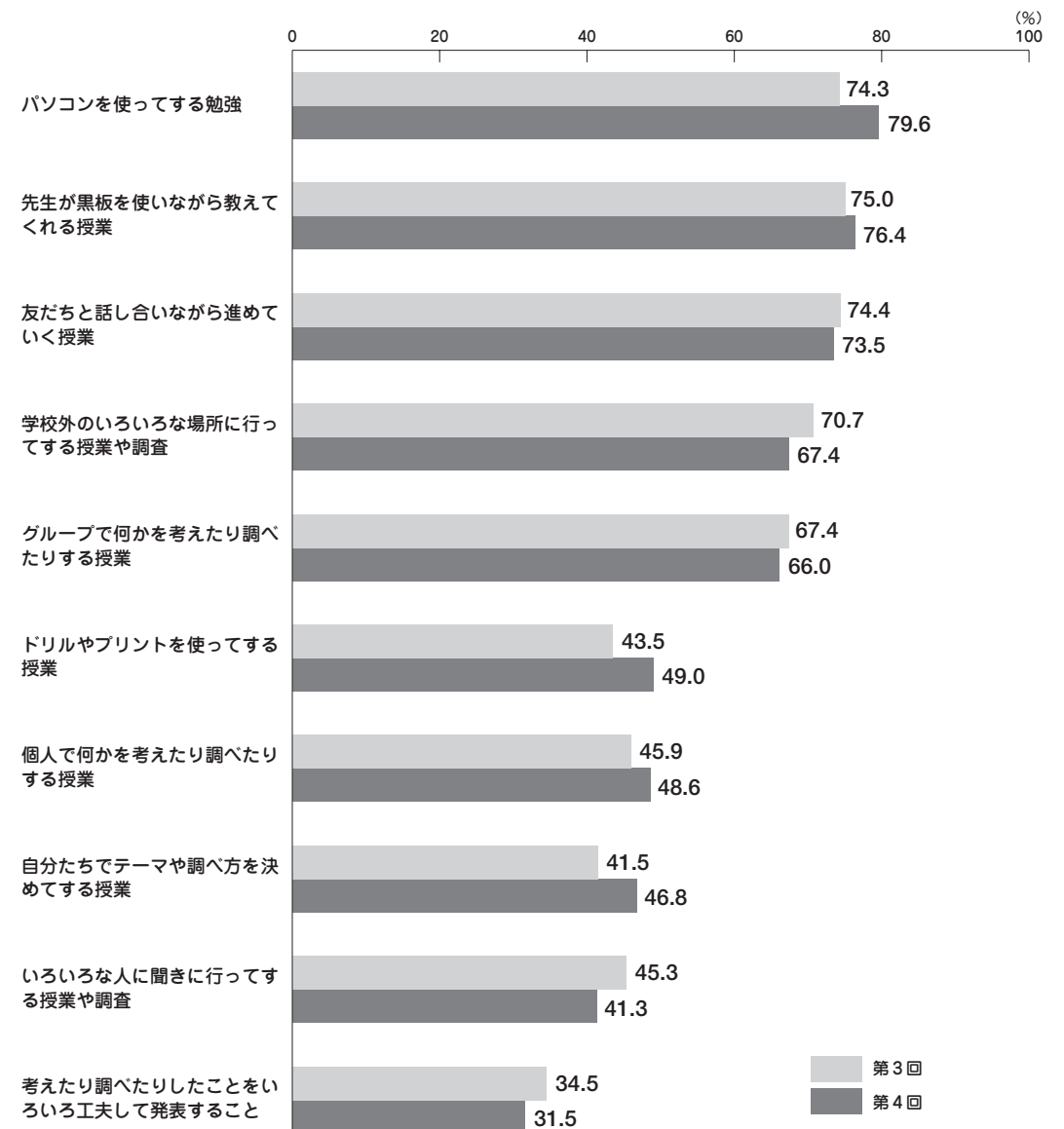
1つめは、上位層は、伝統的な勉強方法や個人の思考力・調べる力を試されるような勉強方法を好むことである。たとえば、「ドリルやプリントを使ってする授業」(上位58.7%>下位39.1%、19.6ポイント差、以下同)、「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」(82.4%>69.8%、12.6ポイント差)、「個人で何かを考えたり調べたりする授業」(53.9%>43.8%、

10.1ポイント差)などで、上位層の「好き」の回答比率が下位層より高い。

2つめは、中位層は自分たちが主体的にテーマを設定し、かついろいろな人に話を聞き、話し合いながら進めていく、新しい勉強方法を好む傾向があることである。たとえば、「グループで何かを考えたり調べたりする授

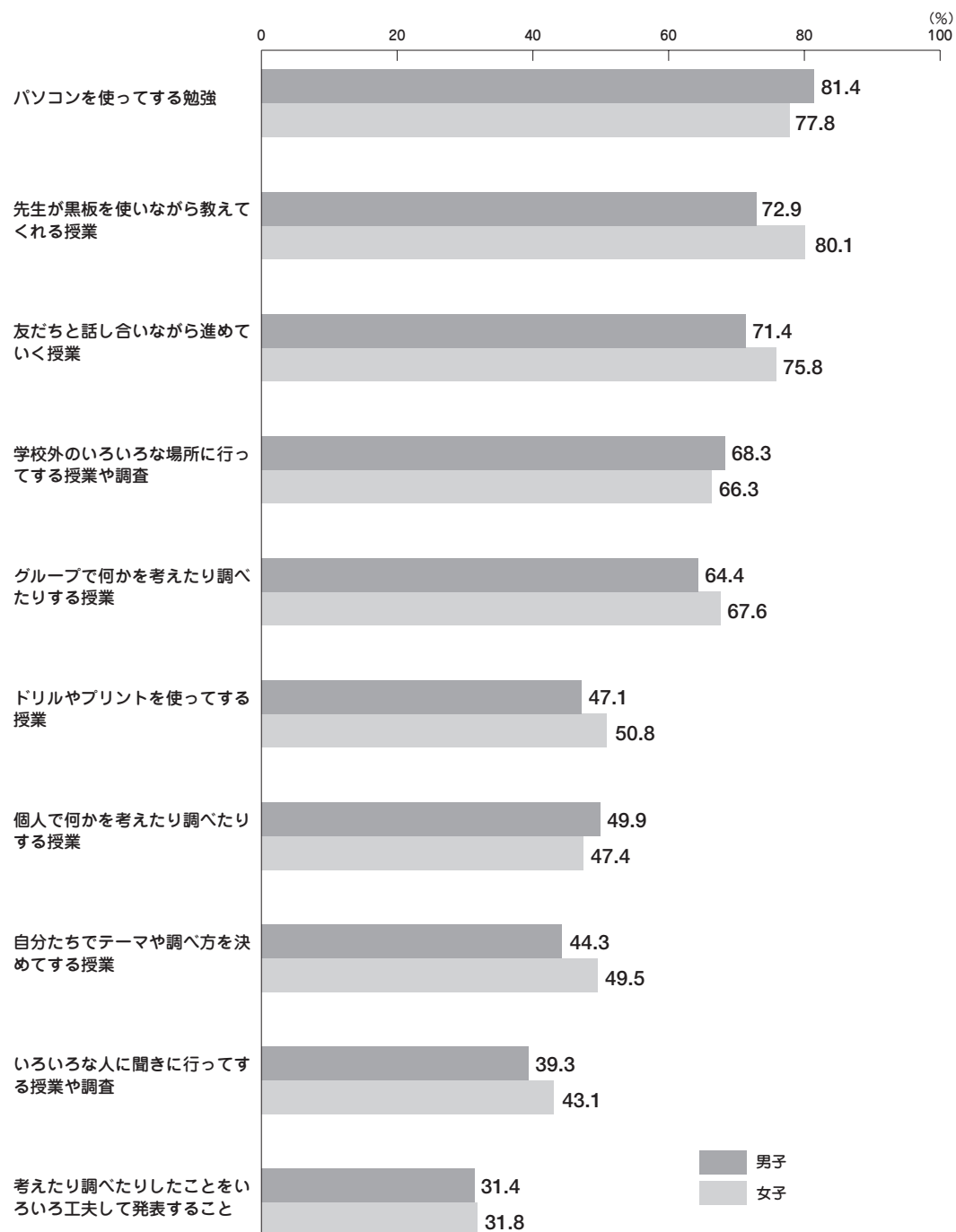
業」(上位63.9%、中位71.0%、下位65.1%、以下同)、「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」(44.9%、50.1%、47.0%)、「学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査」(65.9%、70.1%、67.8%)などでは、上位層や下位層より中位層のほうが高い数値を示している。

図2-1-7 好きな学校の勉強方法(時系列)



注1) 数値は「とても好き」と「好き」の合計。
 注2) 第1回・第2回は該当項目なし。
 注3) サンプル数は第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-8 好きな学校の勉強方法(性別)



注1) 数値は「とても好き」と「好き」の合計。
 注2) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。

表2-1-3 好きな学校の勉強方法(全体・成績の自己評価別)

	全体 (2,371)	上位 (828)	中位 (475)	下位 (1,006)
パソコンを使ってする勉強	79.6	80.4	80.8	78.5
先生が黒板を使いながら教えてくれる授業	76.4	82.4	80.8	69.8
友だちと話し合いながら進めていく授業	73.5	73.2	77.3	71.7
学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査	67.4	65.9	70.1	67.8
グループで何かを考えたり調べたりする授業	66.0	63.9	71.0	65.1
ドリルやプリントを使ってする授業	49.0	58.7	52.9	39.1
個人で何かを考えたり調べたりする授業	48.6	53.9	51.6	43.8
自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業	46.8	44.9	50.1	47.0
いろいろな人に聞きに行っている授業や調査	41.3	37.8	43.2	43.2
考えたり調べたりしたことをいろいろな工夫して発表すること	31.5	32.9	36.9	27.8

注1) 数値は「とても好き」と「好き」の合計。
 注2) 成績の自己評価別での最大値に○をつけた。
 注3) ()内はサンプル数。

2. 家での学習の様子

① 家庭学習の頻度

家での学習頻度は「ほとんど毎日する(週に6~7日)」が、第1回19.9%→第2回18.7%→第3回18.7%→第4回28.5%と変化している。毎日家でこつこつ勉強する習慣を身につけている中学生が増加しているようだ。地域別にみると、とくに郡部で学習頻度が高くなっていることがわかる。

Q 家での勉強についてうかがいます(学習塾や予備校、家庭教師との学習は除きます)。あなたはふだん、家でどのくらい勉強をしますか。

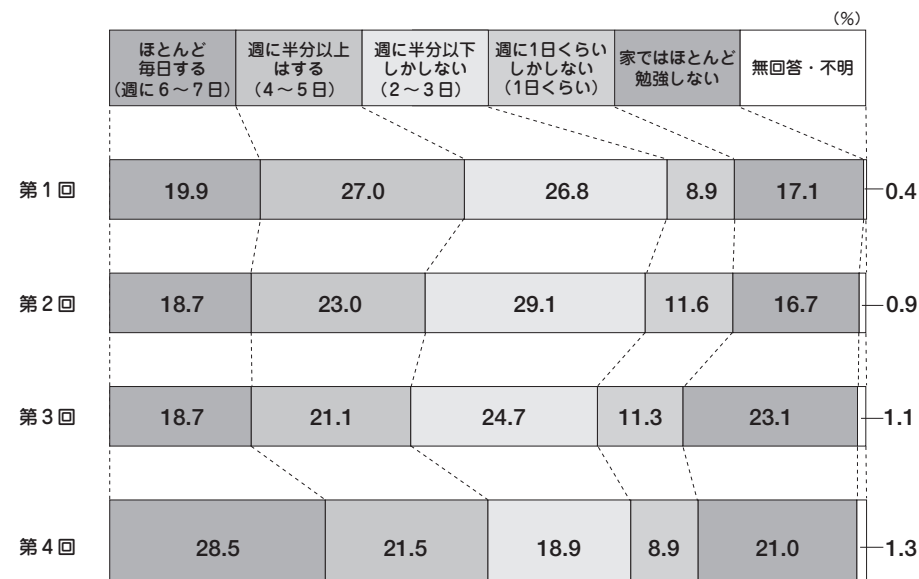
中学生は、家で週に何日勉強をしているのだろうか(図2-1-9)。第4回の結果をみると、「ほとんど毎日する(週に6~7日)」が28.5%と最も多い。第1回~第3回と比較すると「ほとんど毎日する」中学生は10ポイント近く増え、毎日家でこつこつ勉強する習慣を身につけている中学生が増加しているようだ。

過去の調査結果からも家庭学習の頻度は、地域差が大きいことがわかっている。そこで、地域別に家庭学習の頻度の時系列変化をみよう(図2-1-10)。今回の結果からは、郡部の中学生の学習頻度に大幅な伸びがみられた。もともと郡部の中学生は、家庭学習頻度が大都市や地方都市に比べて高く、第3回

でも、65.4%の中学生が毎日または週半分以上勉強していた。それに対し、大都市、地方都市の中学生の家庭学習頻度はそこまで高くなく、「ほとんど毎日する」+「週に半分以上はする(4~5日)」の比率(以下同)は、大都市23.4%、地方都市35.4%となっている。第3回の時点でも、郡部は他地域に比べ、この比率が30~40ポイント程度高い。

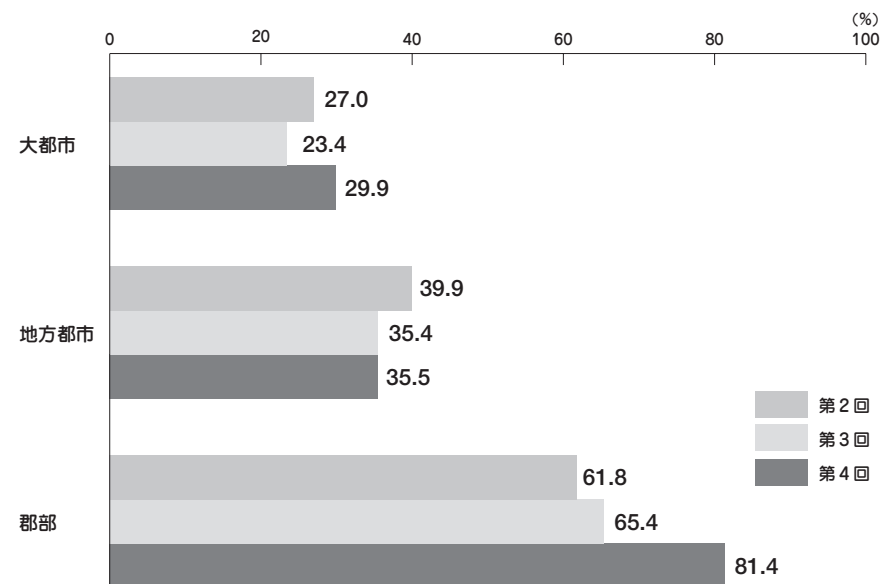
ところが今回は、大都市29.9%、地方都市35.5%、郡部81.4%と、大都市では6.5ポイントの伸び、地方都市ではほとんど変化がないのに対して、郡部においては16.0ポイントも増加している。この郡部の目覚ましい学習への回帰については、次の「②学校外での学習時間」の報告と合わせて分析を行いたい。

図2-1-9 家庭学習の頻度(時系列)



注) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-10 家庭学習の頻度(地域別×時系列)



注1) 数値は「ほとんど毎日する(週に6~7日)」と「週に半分以上はする(4~5日)」の合計。
 注2) サンプル数は第2回大都市937名、地方都市1,035名、郡部783名。第3回大都市851名、地方都市943名、郡部709名。第4回大都市716名、地方都市822名、郡部833名。

② 学校外での学習時間

「2時間以上」勉強する中学生の比率は、第1回44.3%→第2回38.6%→第3回32.7%→第4回37.7%と推移している。平均学習時間は、第1回96.9分→第2回90.0分→第3回80.3分→第4回87.0分と、今回の調査では前回より約7分増加している。宿題にかかる時間は平均38.7分で、学習時間の44.5%を占める。

Q

家での勉強時間などについてうかがいます。

- あなたはふだん(月曜日～金曜日)、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。
- 上で答えた勉強時間のうち、学校の宿題や課題をする時間は何時間くらいですか。
- 休日には、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。
- ふだん(月曜日～金曜日)テレビを1日に何時間くらい見ますか。

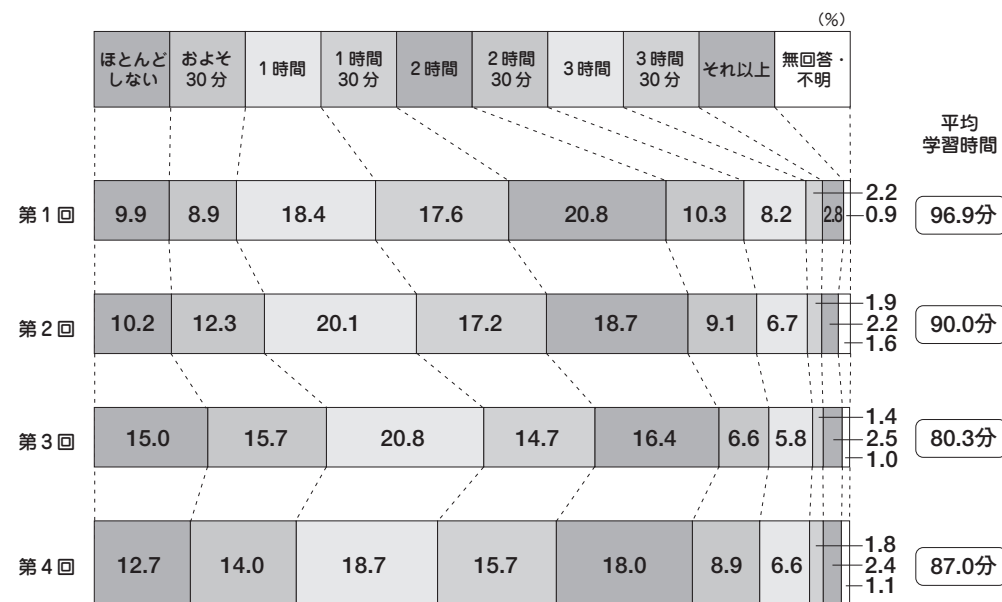
次に中学生の学校外での学習時間をみてみよう(図2-1-11)。学習頻度と同様に、中学生の学習時間も増加しているようだ。「2時間以上」勉強する中学生の比率は、第1回44.3%→第2回38.6%→第3回32.7%→第4回37.7%と推移している。第1回から第3回までは、「2時間以上」勉強する中学生の比率は減少の一途をたどっているようにみえたが、今回、5ポイントの増加に転じている。逆に「ほとんどしない」+「およそ30分」の比率は、第1回18.8%→第2回22.5%→第3回30.7%→第4回26.7%と、第3回と比べると減少している。

そこで「①家庭学習の頻度」(p.40～41)でみたように、地域別に1日の学習時間をみてみよう(図2-1-12)。学習頻度の結果(図2-1-10)からは、郡部が大都市や地方都市に比べて高い様子がみられた。第3回の学習時間の平均は、大都市(79.5分)や地方都市(88.6分)が郡部(70.4分)の学習時間の平均を上回っていた。ところが、今回は郡部(87.1分)が20分近く伸び、大都市の学習時

間(81.1分)を上回る結果となった。

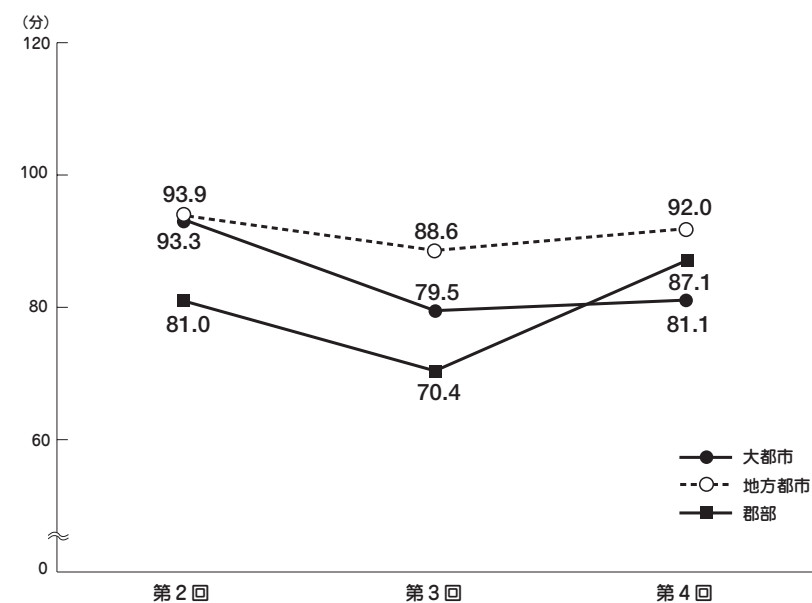
第3回までの結果を振り返ると、学習頻度は大都市や地方都市よりも郡部が高いが、学習時間は大都市や地方都市のほうが、郡部よりも長い。この理由を考えるに際し学習頻度と学習時間の質問文をみると、前者は「学習塾や予備校、家庭教師との学習は除く」と規定しているのに対し、後者は「学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含める」と規定している。通塾率(p.59参照)の高い大都市(49.3%)や地方都市(59.5%)の中学生は、家で勉強する頻度は郡部よりも低いが、学習塾や予備校で勉強しているため、そこでの学習時間を含めると平均学習時間が郡部を上回っていたということになる。ところが、今回の調査からは、郡部の学習時間の増加がみられ、大都市を上回っている。郡部の通塾率に変化はほとんどみられないことを考えると、郡部において、「家での」学習頻度がさらに伸びているためだといえるのではないだろうか。

図2-1-11 平日の学習時間(時系列)



注1) 学習時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて算出した。ただし「無回答・不明」を除いて算出している。
注2) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-12 平日の平均学習時間(地域別×時系列)



注1) 学習時間の平均の算出方法は図2-1-11と同様。
注2) サンプル数は第2回大都市937名、地方都市1,035名、郡部783名。第3回大都市851名、地方都市943名、郡部709名。第4回大都市716名、地方都市822名、郡部833名。

※「2時間以上」は「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「それ以上」の合計。

さて、先ほどみた郡部の学習頻度・学習時間の伸びはどのように説明されるのだろうか。学力低下論争後の各学校の取り組みの変化だろうか。今回の調査から「宿題をする時間」に関してたずねる項目を設定している。こちらをみてみよう(図2-1-13)。

中学生が宿題をする時間は、「30分」の回答が一番多く33.6%である。次に「1時間」17.2%、「15分」15.6%が続く。「ほとんどしない」中学生も約1割いる。宿題の平均時間を算出すると38.7分である。これを地域別にみると(表2-1-4)、大都市33.1分、地方都市31.9分、郡部は50.0分となる。郡部が他と比べて20分近く長いことを考えると、郡部の中学生の学習時間の長さは、とくに宿題などの学校の取り組みによって説明される部分が多いということがいえるのではないだろうか。

このように地域に分けて結果をみる際に注意しなければならないのは、今回の調査が公立中学校のみの中学生を対象に行われたということだ。大都市の猛烈に勉強している小学生(『第4回学習基本調査・国内調査報告書・

小学生版』参照)は、中学受験を経て、私立や国立の中学校に通っており、調査の対象外になっている。私立や国立の中学校も対象に含まれば、大都市の中学生の学習時間はもう少し増えただろう。

さらに、休日の学習時間を時系列に並べてみてみよう(図2-1-14)。休日の学習時間も、平日の学習時間同様に長時間学習する中学生が第4回で増加している傾向がみられる。第3回には平均55.7分だった休日の学習時間は、20分ほど長い78.3分になった。休日には、「ほとんどしない」という中学生も3人に1人から4人に1人の割合に減っている。

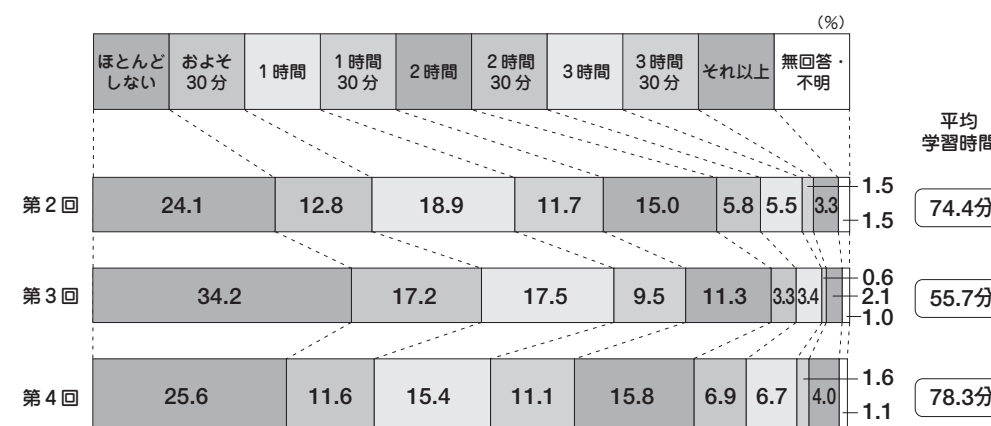
学習時間は増加していることがわかったが、テレビ視聴時間はどうか。図2-1-15をみると、第3回には「それ以上」(3時間30分以上)の回答が全体の3割と一番多かったが、今回の調査では一番多いことには変わりはないものの「それ以上」の回答は2割になっていることがわかる。学習時間の増加やパソコン利用頻度(p.68~69)の増加とともに、テレビ視聴時間は減少していると考えられる。

表2-1-4 平日に宿題をする時間(地域別)

	宿題をする時間の平均(分)	学習をする時間の平均(分)	学習時間に占める宿題の比率(%)
大都市(716)	33.1	81.1	40.8
地方都市(822)	31.9	92.0	34.7
郡部(833)	50.0	87.1	57.4
全体(2,371)	38.7	87.0	44.5

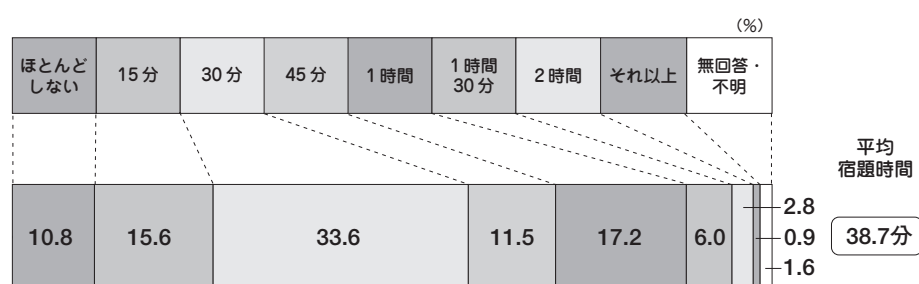
注1) 学習時間・宿題時間の平均の算出方法は、図2-1-11、13と同様。
注2) ()内はサンプル数。

図2-1-14 休日の学習時間(時系列)



注1) 第1回は該当項目なし。
注2) 学習時間の平均の算出方法は、図2-1-11と同様。
注3) サンプル数は第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-13 平日に宿題をする時間(全体)



注1) 平日の宿題時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「2時間」を120分、「それ以上」を150分のように置き換えて算出した。ただし、「無回答・不明」は算出する際に除いている。
注2) サンプル数は2,371名。

図2-1-15 平日のテレビ視聴時間(時系列)



注) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

③ テスト勉強の開始時期

テストに向けて「2週間くらい前から」準備を始めるという中学生は35.8%でおよそ3人に1人いる。この比率は、第1回と比べると17ポイント近く、また第3回と比べると10ポイント程度増加している。全体的にテスト勉強開始時期の早期化が進んでいるようだ。

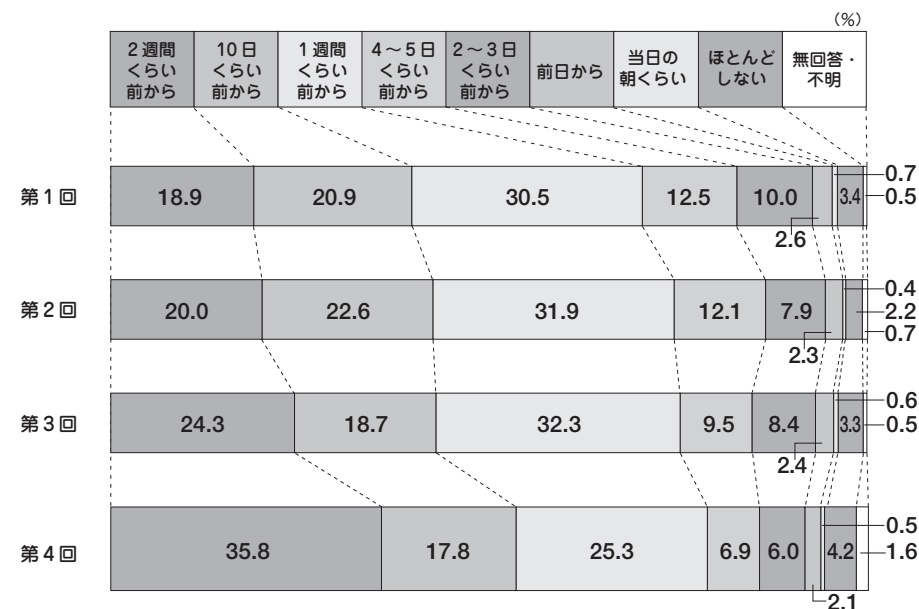
Q | テスト(定期考査)前には、あなたはいつ頃からテスト勉強を始めますか。

中学生の学習時間からは、第3回調査時の学習時間の一番少ない時期を脱し、中学生が学習に向かっている様子が明らかになった。テスト勉強の開始時期はどうだろうか。時系列で「10日以上前から」「2週間くらい前から」+「10日くらい前から」の%、以下同)の比率をみると(図2-1-16)、第1回39.8%→第2回42.6%→第3回43.0%→第4回53.6%と変化している。とくに今回「2週間くらい前から」準備を始めるという中学生は35.8%でおよそ3人に1人に達している。こ

の比率は、第1回と比べると17ポイント近く、また第3回の結果と比べると10ポイント程度増加している。

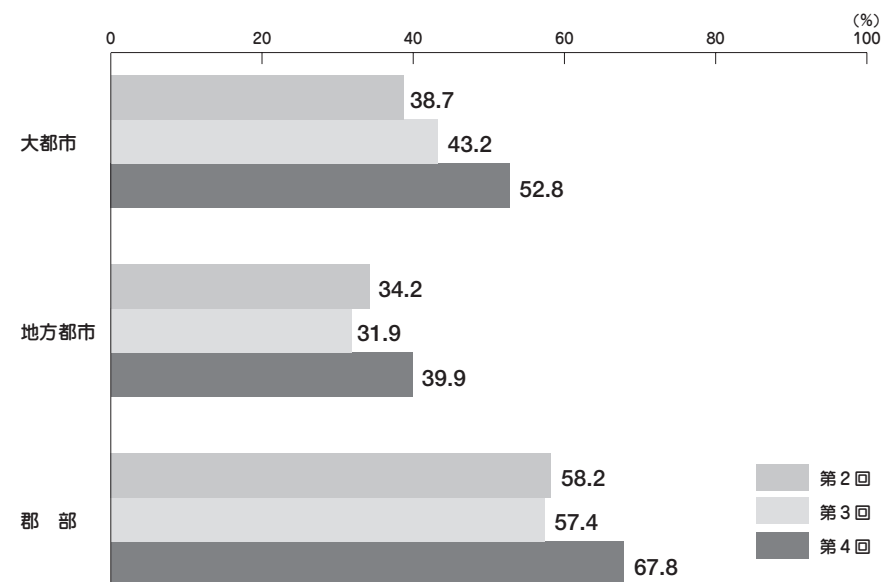
次に地域別に「10日以上前から」始める比率をみてみよう(図2-1-17)。学習時間は郡部で伸びている傾向がみられたが、テスト勉強の開始時期については、どの地域でも「10日以上前から」という回答が第3回から10ポイント程度伸びている。一部の地域に限らず、全体的に早期化が進んでいるようだ。

図2-1-16 テスト勉強の開始時期(時系列)



注) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-17 テスト勉強の開始時期(地域別×時系列)



注1) 数値は「2週間くらい前から」と「10日くらい前から」の合計。
 注2) サンプル数は第2回大都市937名、地方都市1,035名、郡部783名。第3回大都市851名、地方都市943名、郡部709名。第4回大都市716名、地方都市822名、郡部833名。

④ 家での学習内容

中学生の家での学習内容の中心になっているのは、「学校の宿題」(87.4%)、「学校の授業の復習」(45.1%)である。また、「学校の宿題」「学校の授業の予習」「学校の授業の復習」では、第3回まで続いていた減少傾向がみられなくなった。

Q | 家では主にどんな勉強をしていますか。

ここまで家庭の学習について、主として量的な側面(家庭学習の頻度や時間)に注目してきた。つづいては、家庭学習の内容や意識・態度といった、質的な側面を検討していく。まずとりあげるのは、家での学習内容である。質問紙では8つの選択肢を用意し、複数回答を求めている。

表2-1-5で第4回の結果をみると、家での学習内容でもっとも多いのは「学校の宿題」の87.4%、2番目に多いのは「学校の授業の復習」の45.1%である。この2項目以外はすべて3割を下回っており、「塾や予備校の授業の予習・復習」が27.1%、「学校の授業の予習」が23.0%、「通信教育」が21.3%と続いている。

時系列でも、**「学校の宿題」「学校の授業の復習」という上位の2項目は、第1回から第4回まで常に4割以上の中学生が選択している。**一方で、「宅配の家庭学習教材」は

第1回の18.5%から第4回の3.7%へ、「書店などで売っている問題集・参考書」は第2回の31.1%から第4回の17.6%へと、一貫して減少している。中学生の家庭での学習内容は、学校の授業にかかわるものを中心になっている。

こうした学校の授業にかかわる学習については、第3回まで続いていた減少傾向が止まった点も特徴的である。第1回から第3回にかけて「学校の宿題」「学校の授業の予習」「学校の授業の復習」がそれぞれ5ポイント程度低下したため、第3回の調査報告時には、授業や宿題といった学校にかかわる学習の後退が指摘された。しかし、第4回は上記の項目において減少はみられなかった。学力低下が唱えられた時期を経て、さまざまな工夫をしてきた学校の努力が実を結んだ結果ともいえるのではないだろうか。

表2-1-5 家での学習内容(時系列)

	(%)			
	第1回 (2,544)	第2回 (2,755)	第3回 (2,503)	第4回 (2,371)
学校の宿題	89.9	87.6	84.5	87.4
学校の授業の予習	27.8	24.8	21.9	23.0
学校の授業の復習	46.3	47.5	42.0	45.1
塾や予備校の授業の予習・復習	—	—	26.5	27.1
塾や予備校の授業の予習	11.6	12.3	—	—
塾や予備校の授業の復習	15.3	17.5	—	—
通信教育	19.1	28.6	23.2	21.3
宅配の家庭学習教材	18.5	8.9	6.4	3.7
書店などで売っている問題集・参考書	—	31.1	24.7	17.6
その他	5.4	4.8	5.3	3.9

注1) 複数回答。

注2) —は該当項目なし。

注3) ()内はサンプル数。

⑤ 家での学習の様子

「出された宿題をきちんとやっていく」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」「テストで間違えた問題をやり直す」の3項目で、7割以上が「あてはまる」と回答している。
全体的に時系列でも肯定的な回答の増加が目立ち、総じてまじめな学習態度が見受けられる。

Q | 家での勉強の様子についてうかがいます。

学習内容について、家庭学習の態度をみてみよう。全体として、まじめな学習態度が見受けられる。

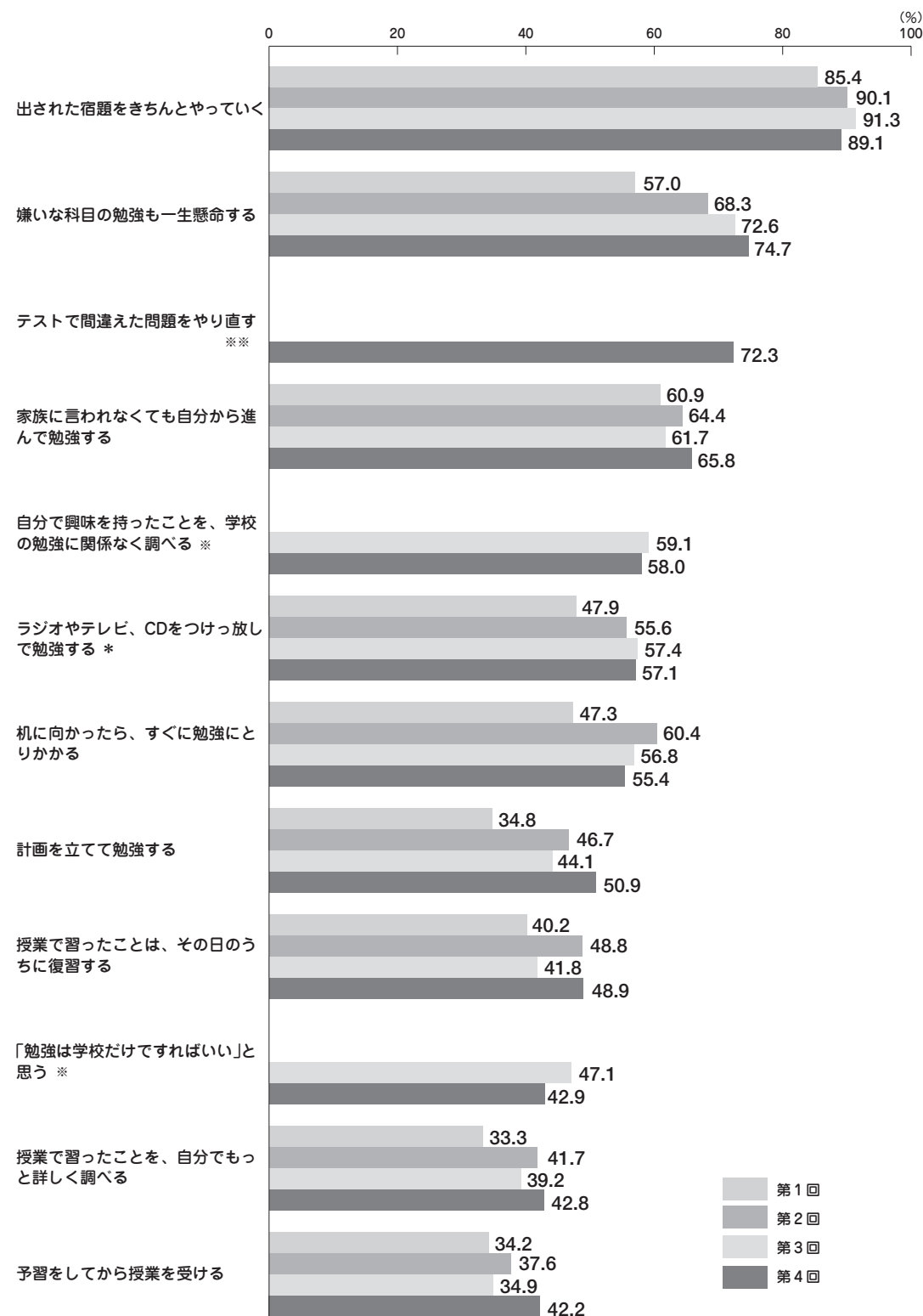
図2-1-18で第4回の結果をみてみよう。たずねている12項目の中で、「あてはまる」「あてはまる」+「まああてはまる」の%、以下同)が多い順に、「出された宿題をきちんとやっていく」(89.1%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(74.7%)、「テストで間違えた問題をやり直す」(72.3%)となっている。これらはすべて、「あてはまる」とした中学生が7割を超えている。

また、時系列でみると、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(第1回57.0%→第4回74.7%、以下同)、「計画を立てて勉強する」(34.8%→50.9%)の2項目において、第1回から第4回にかけて「あてはまる」と回答した比率がとくに大きく増加している。また、「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」(40.2%→48.9%)、「予習をしてから授業を受ける」(34.2%→42.2%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(60.9%→65.8%)の3項目でも、第1回の水準から

それぞれ5~8ポイント程度増加している。自身の勉強態度に関して、概して肯定的な回答が多くなっている。

性別でみると(表2-1-6)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(女子78.2%>男子71.6%、以下同)、「計画を立てて勉強する」(53.9%>47.8%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(68.6%>63.3%)の3項目で女子のほうが5ポイント以上多い。女子のほうが、計画的でまじめに家庭学習をしている様子がうかがえる。しかし一方で、男子のほうが積極的な学習態度を示している項目もある。「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」(男子61.4%>女子54.1%)では、男子のほうが「あてはまる」と回答した比率が高い。また、ながら勉強の傾向をたずねる「ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する」では、女子の61.3%に対して男子は53.1%と少なくなっている。計画性・まじめさでは女子ほど肯定的な態度がみられないが、自分の意志で行う学習では男子の積極性が目立っている。

図2-1-18 家での学習の様子(時系列)



注1) 数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計。
注2) ※は第1回・第2回に該当項目なし。**は第1回~第3回に該当項目なし。
注3) *は第1回は「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」。
注4) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

表2-1-6 家での学習の様子(全体・性別)

	(%)		
	全体 (2,371)	男子 (1,210)	女子 (1,151)
出された宿題をきちんとやっていく	89.1	86.8	91.6
嫌いな科目の勉強も一生懸命する	74.7	71.6 <	78.2
テストで間違えた問題をやり直す	72.3	71.6	73.2
家族に言われなくても自分から進んで勉強する	65.8	63.3 <	68.6
自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる	58.0	61.4 >	54.1
ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する	57.1	53.1 <	61.3
机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる	55.4	55.0	55.7
計画を立てて勉強する	50.9	47.8 <	53.9
授業で習ったことは、その日のうちに復習する	48.9	48.3	49.6
「勉強は学校だけですればいい」と思う	42.9	45.8 >	39.6
授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる	42.8	45.3	40.4
予習をしてから授業を受ける	42.2	42.7	41.7

注1) 数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計。
 注2) <>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

⑥ 日常生活の中での「学習」

日常生活の中での「学習」で、もっとも多かったのは「読みたい本を本屋で探して買う」の69.9%、つづいて「文学作品や小説・物語を読む」の53.5%であった。一方、もっとも少ないのは「美術館や博物館に行く」の10.6%であった。

Q | あなたは、ふだん(学校の授業や宿題以外で)次のことをどのくらいしますか。

ここまでは、学校での勉強やそれを補うかたちでの家庭学習について扱ってきた。しかし、読書や美術館・博物館の見学といったさまざまな体験もまた、広義の「学習」としてとらえることができるだろう。ここでは、中学生がそのような日常生活の中での「学習」をどの程度行っているのか、調査結果をみていきたい。

図2-1-19で第4回の数値をみると、半数以上が「する」(「よくする」+「時々する」の%、以下同)と回答したのは、「読みたい本を本屋で探して買う」(69.9%)、「文学作品や小説・物語を読む」(53.5%)の2項目のみであった。小学生に対しても同様の項目をたずねているが、そこでは9項目中6項目で5割を超えていた(『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』参照)。小学生から中学生になると、こうした日常生活の中での「学習」が急に少なくなる様子がうかがえる。

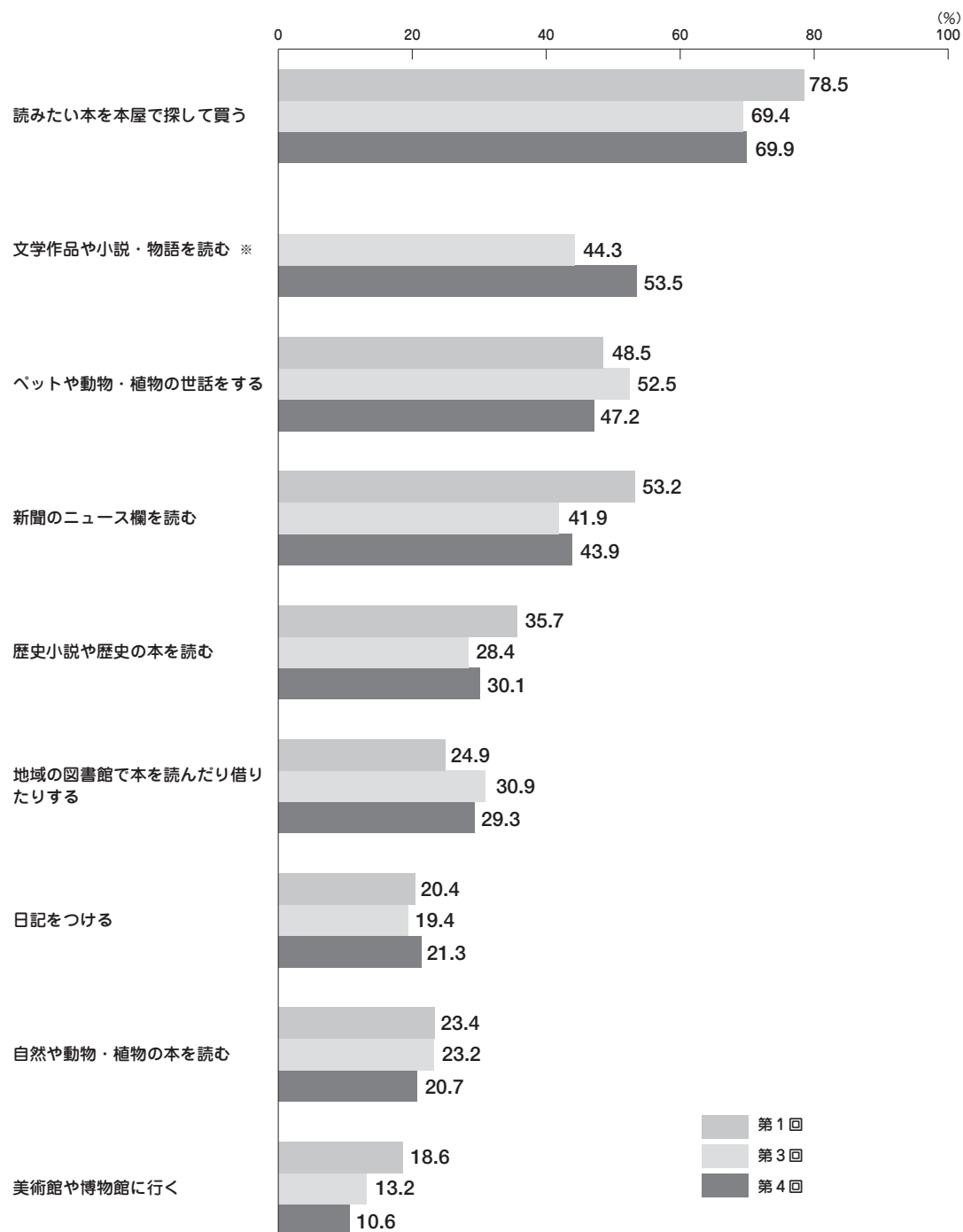
時系列でみると(図2-1-19)、「学習」の頻度が減少している項目が目立つ。「新聞のニュース欄を読む」(第1回53.2%→第4回43.9%、以下同)、「読みたい本を本屋で探して買う」(78.5%→69.9%)、「美術館や博物館に行く」(18.6%→10.6%)、「歴史小説や歴史の本を読む」(35.7%→30.1%)の4項目で、5ポイント以上の減少がみられる。反対に顕

著な増加がみられたのは、「文学作品や小説・物語を読む」である。第1回ではたずねていないが、第3回から第4回にかけては10ポイント近く増加している(第3回44.3%→第4回53.5%)。

性別にみると(表2-1-7)、女子のほうがこうした「学習」の頻度が高い項目が多くみられる。具体的には、「日記をつける」(女子31.3%>男子11.8%、以下同)、「文学作品や小説・物語を読む」(61.9%>45.7%)、「読みたい本を本屋で探して買う」(74.9%>65.1%)、「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」(34.1%>24.6%)、「ペットや動物・植物の世話をする」(51.2%>43.3%)の5項目において8~20ポイント程度、女子のほうが高い頻度を示している。

しかし、「歴史小説や歴史の本を読む」(男子36.5%>女子23.5%、以下同)、「新聞のニュース欄を読む」(48.2%>39.4%)、「自然や動物・植物の本を読む」(23.9%>17.3%)の3項目では男子のほうが高い。これらは自然科学・社会科学への興味関心につながる「学習」ととらえられる。「①好きな教科」(p.26~28)でも、「女子のほうが『国語』が好き、男子のほうが『社会』や理数系科目が好き」という傾向がみられたが、こうした日常生活の中での「学習」においても、性別による分化が生じている様子がうかがえる。

図2-1-19 日常生活の中での「学習」(時系列)



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。
 注2) 第2回は該当項目なし。
 注3) ※は第1回に該当項目なし。
 注4) サンプル数は第1回2,544名、第3回2,503名、第4回2,371名。

表2-1-7 日常生活の中での「学習」(全体・性別)

	全体 (2,371)	男子 (1,210)	女子 (1,151)
読みたい本を本屋で探して買う	69.9	65.1	74.9
文学作品や小説・物語を読む	53.5	45.7	61.9
ペットや動物・植物の世話をする	47.2	43.3	51.2
新聞のニュース欄を読む	43.9	48.2	39.4
歴史小説や歴史の本を読む	30.1	36.5	23.5
地域の図書館で本を読んだり借りたりする	29.3	24.6	34.1
日記をつける	21.3	11.8	31.3
自然や動物・植物の本を読む	20.7	23.9	17.3
美術館や博物館に行く	10.6	8.8	12.4

注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。
 注2) «»は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

⑦ 家庭環境

親とのかかわりを示す項目をみると、「お母さんは私の成績をよく知っている」(80.9%)、「親とよく話をする」(68.2%)、「お父さんは私の成績をよく知っている」(52.7%)の順に多くなっている。

Q | あなたの家のことについてうかがいます。

この項の最後に、さまざまなかたちで「家での学習の様子」に影響をもたらす、家庭環境についてみておこう。

表2-1-8は質問した13項目のうち、親とのかかわりを示す7項目を示したものである。これをみると、「お母さんは私の成績をよく知っている」(80.9%)、「親とよく話をする」(68.2%)、「お父さんは私の成績をよく知っている」(52.7%)の順に多く、これらは半分以上の中学生が「あてはまる」と回答している。「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」は29.4%にとどまり、6割程度が「あてはまる」としていた小学生に比べると、急激に低くなっている(『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』参照)。

時系列で見ると、「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」(第1回38.2%→第4回33.3%、以下同)、「親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(42.6%→36.6%)で、それぞれ「あてはまる」と回答した比率が5ポイント程度減少している。他の項目ではとくに大きな変化がみられない。本調査のとらえた範囲ではあるが、親が

具体的に一緒に行動するという関与のしかたは減少傾向にある可能性が考えられる。

性別にみると、「親とよく話をする」(女子74.4%>男子62.3%、以下同)、「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」(33.8%>25.4%)、「親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(40.3%>33.1%)の3項目で、女子のほうが5ポイント以上多くなっている。一方で「お父さんは私の成績をよく知っている」(男子56.1%>女子49.3%、以下同)、「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」(35.9%>30.8%)の2項目では、男子のほうが5ポイント以上多い。

また、今回から新たにたずねている「自分専用のパソコンを持っている」は12.2%、「自分専用の携帯電話を持っている」は36.8%であった(表2-1-9)。「自分専用の携帯電話を持っている」は性差・地域差が大きく、とくに大都市と郡部とでは50ポイントほどの開きがあった(女子40.3%>男子33.6%、大都市63.7%>地方都市38.0%>郡部12.5%)。生徒文化の違い、安全・防犯への意識の違いなどが背景として考えられる。

表2-1-8 親とのかかわりについて(時系列・性別)

	第1回 (2,544)	第2回 (2,655)	第3回 (2,503)	第4回 (2,335)	第4回	
					男子 (1,191)	女子 (1,134)
					お母さんは私の成績をよく知っている	82.8
親とよく話をする	—	—	66.6	68.2	62.3	74.4
お父さんは私の成績をよく知っている	50.2	49.3	53.2	52.7	56.1	49.3
親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある	42.6	46.0	40.4	36.6	33.1	40.3
ほとんど毎日、親は私に「勉強しなさい」と言う	38.2	36.9	35.0	33.3	35.9	30.8
この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある	—	—	25.0	29.4	25.4	33.8
親は私にいい大学に行くことを期待している	—	—	—	22.0	23.4	20.6

注1) 複数回答。
 注2) —は該当項目なし。
 注3) 性別で<>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注4) ()内はサンプル数。第2回・第4回では、全員が全選択肢を無回答とした学校を除いて集計している。

表2-1-9 パソコン・携帯電話の所有率(全体・性別・地域別)

	全体 (2,335)	男子 (1,191)	女子 (1,134)	地域別		
				大都市 (716)	地方都市 (786)	郡部 (833)
自分専用の携帯電話を持っている	36.8	33.6	<	40.3	63.7	>> 38.0 >> 12.5
自分専用のパソコンを持っている	12.2	12.3		12.2	14.1	13.2 9.7

注1) 複数回答。
 注2) <>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。全員が全選択肢を無回答とした学校を除いて集計している。

3. 学校外の学習機会

① 学習塾・予備校の利用

今回の調査をみるかぎり、学習塾や予備校への通塾率は大きな変化がみられない。通っている学習塾のタイプは、「補習塾」が減少している一方で、「進学塾」やその他の塾が増加している。

Q あなたは今、放課後や休日に、学習塾や予備校へ行っていますか(そろばん、習字などの塾は除きます。自習教室は含めます)。
【行っている人にうかがいます】

- 週に何日行っていますか。
- あなたの行っているのは、どんな学習塾(予備校)ですか。

完全学校週5日制の導入、学習指導要領の内容の削減などの影響で、学校の教育内容に不安を感じる親が増え、子どもを塾に通わせる比率が増えたといわれている。実際にはどうだろうか。学習塾や予備校に通っているかどうかをたずねたところ、「行っている」の回答は第1回45.8%→第2回47.5%→第3回43.5%→第4回42.7%と推移している(表2-1-10)。今回の調査では、「無回答・不明」の割合が約1割あることも考えると、第2回から第4回までの10年間、若干の減少傾向がみられるが、変化をしているとはいえない。

通塾率は地域によって大きな差がある。地域別にみると、大都市49.3%、地方都市59.5%、郡部20.4%と、地方都市や大都市の通塾率が高く、郡部では低い。図表には示していないが、前回からこの傾向は続いている。「②学校外での学習時間」(p.42~45)でみた結果と合わせて考えると、郡部では中学生の学習を主に学校や家庭が担っているのに対して、大都市や地方都市では、学習を学校外の機関に頼りがちな傾向にあるといえるのではないだろうか。

通塾日数についても(図2-1-20)、「1

日」「2日」の比率が第3回に比べて若干の減少となつてはいるが、ほとんど変化がない。ただ、第1回と比べると通塾日数は減少の傾向にあるようだ。

次に、通っている学習塾のタイプをみてみよう(表2-1-11)。学習塾のタイプは、「学校の勉強がわかるようになるための補習塾(以下、補習塾)」が減少している一方で、「高校を受験するための進学塾(以下、進学塾)」やその他の塾が増加している。とくに「補習塾」は、第2回と比べて10.2ポイントの減少、第3回と比べて8.3ポイントの減少となっている。地域別にみると、大都市では「補習塾」の比率が47.3%で他の地域よりも20ポイント近く低い。その一方で、「進学塾」やその他の塾の比率が高くなっている。

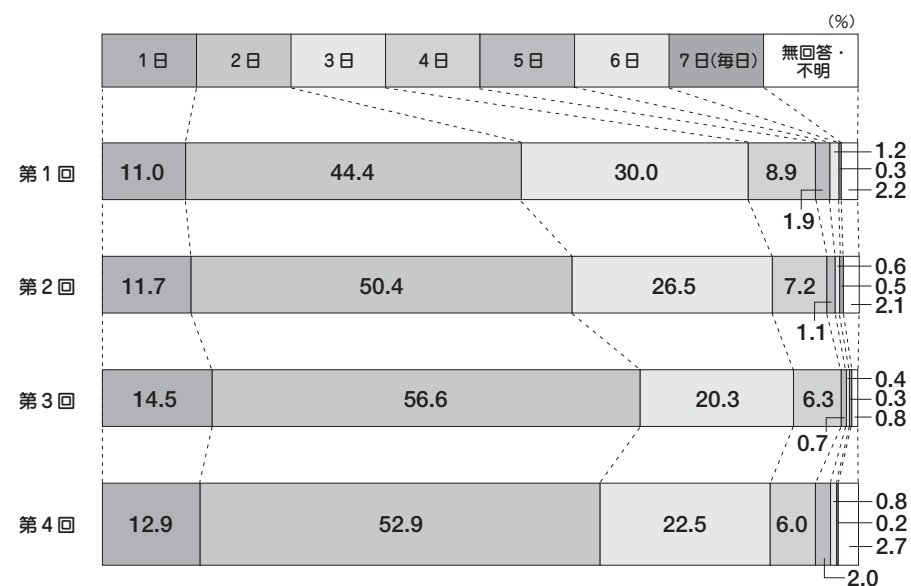
成績の自己評価別にみると(表2-1-12)、上位層は「補習塾」49.8%・「進学塾」37.6%に対し、中位層は「補習塾」59.8%・「進学塾」27.4%、下位層は「補習塾」70.5%・「進学塾」17.3%である。上位層の通塾者は中学2年生の段階で、「進学塾」に通う割合が4割にも達しようとしているのに対し、下位層の通塾者はほとんどが「補習塾」に通っていることが明らかになった。

表2-1-10 学習塾・予備校の利用(時系列・地域別)

	第1回 (2,544)	第2回 (2,755)	第3回 (2,503)	第4回 (2,371)	第4回		
					大都市 (353)	地方都市 (489)	郡部 (170)
行っている	45.8	47.5	43.5	42.7	49.3	59.5	20.4
行っていない	50.5	46.5	52.1	47.4	41.2	33.7	66.3
無回答・不明	3.7	6.0	4.4	9.9	9.5	6.8	13.3

注) ()内はサンプル数。

図2-1-20 通塾日数(時系列)



注1) 学習塾や予備校に「行っている」と回答した人のみを対象としている。

注2) サンプル数は第1回1,166名、第2回1,309名、第3回1,088名、第4回1,012名。

表2-1-11 学習塾のタイプ(時系列・地域別)

	(%)						
	第1回 (1,166)	第2回 (1,309)	第3回 (1,088)	第4回 (1,012)	第4回		
					大都市 (527)	地方都市 (455)	郡部 (184)
学校の勉強がわかるようになるための補習塾	60.3	69.4	67.5	59.2	47.3	65.6	65.3
高校を受験するための進学塾	29.4	22.1	23.9	28.2	35.4	26.4	18.2
その他	7.2	5.8	7.4	10.0	14.2	6.5	11.2
無回答・不明	3.1	2.8	1.3	2.7	3.1	1.4	5.3

注1) 学習塾や予備校に「行っている」と回答した人のみを対象としている。
注2) () 内はサンプル数。

表2-1-12 学習塾のタイプ(成績の自己評価別)

	(%)		
	上位 (418)	中位 (219)	下位 (353)
学校の勉強がわかるようになるための補習塾	49.8	59.8	70.5
高校を受験するための進学塾	37.6	27.4	17.3
その他	11.0	8.7	9.3
無回答・不明	1.7	4.1	2.8

注1) 学習塾や予備校に「行っている」と回答した人のみを対象としている。
注2) () 内はサンプル数。

② 諸学習機会の利用

「通信教育を受けている」が23.3%と最も高い利用率を示し、「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」23.1%が続く。時系列で見ると、「宅配の家庭学習教材をとっている」比率が第1回に比べて10ポイント以上の減少となっているほかは、あまり大きな変化はみられない。

Q | あなたは次のようなことをしていますか。

学習塾、予備校以外の学校外学習機会の利用状況をみてみよう(表2-1-13)。「通信教育を受けている」23.3%、「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」23.1%、「宅配の家庭学習教材をとっている」6.1%、「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」5.7%、「家庭教師について

ている」4.8%、「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」2.1%という結果になった。時系列で見ると、「宅配の家庭学習教材をとっている」比率が第1回に比べて10ポイント以上の減少となっているほかは、あまり大きな変化はみられない。

表2-1-13 諸学習機会の利用(時系列)

	(%)			
	第1回 (2,544)	第2回 (2,755)	第3回 (2,503)	第4回 (2,371)
通信教育を受けている	20.5	28.7	24.8	23.3
今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ ※	24.0	23.6	22.1	23.1
宅配の家庭学習教材をとっている	19.1	12.1	9.4	6.1
今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ *	8.5	3.4	1.9	5.7
家庭教師についている	7.4	7.0	7.6	4.8
学校で朝や放課後の補習授業を受けている	—	1.9	1.5	2.1

注1) 複数回答。
注2) —は該当項目なし。
注3) ※の第1回は「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行った」。*の第1回は「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受けた」。
注4) () 内はサンプル数。

4. 学習の方法

① 学習の方法

「辞書（英語・国語など）を引く」「自分で単語帳・単語カードを作って暗記する」「図鑑や事典で調べる」などが減少し、手間のかかる学習方法が敬遠されるようになってきている傾向が読み取れる。性別では、女子がまじめに学習している様子がわかる。

Q 家では、どんな勉強の仕方をする人が多いですか。

本項では、学習方法やメディアの利用状況などについてたずねた項目を中心に検討していきたい。

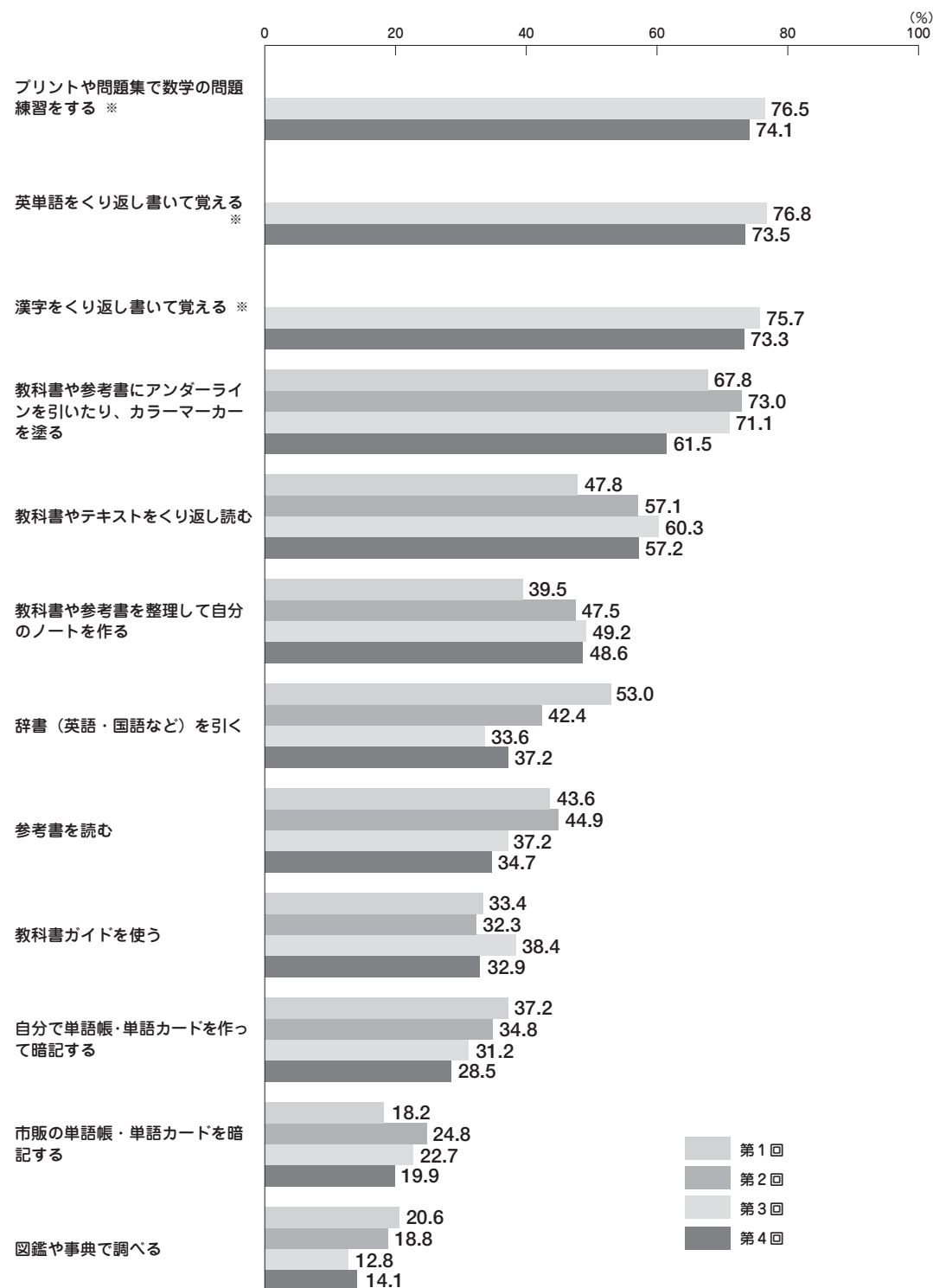
図2-1-21では、学習の方法について時系列の変化を示している。数値は、「よくする」と「時々する」を合計したものである。これをみると、減少傾向を示す項目が多いことがわかる。第1回と比べて5ポイント以上減少した項目は、「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」(第1回67.8%→第4回61.5%、以下同)、「辞書（英語・国語など）を引く」(53.0%→37.2%)、「参考書を読む」(43.6%→34.7%)、「自分で単語帳・単語カードを作って暗記する」(37.2%→28.5%)、「図鑑や事典で調べる」(20.6%→14.1%)の5項目である。辞書を引いたり、単語帳を作ったり、図鑑などを使って調べたりといった相対的に手間のかかる学習方法が、敬遠されるようになってきている傾向が読み取れる。

一方、第1回と比べて5ポイント以上増加している項目は、「教科書やテキストをくり返し読む」(47.8%→57.2%)、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」(39.5%→48.6%)の2項目である。数値の変化からは、学習の際に、教科書がよく活用されるように

なっていることがわかる。また、「自分のノートを作る」という回答が増えている。「②学習方法のタイプ」(p.65)でも、「自分で整理しながら勉強する」タイプが増えていることが読み取れるが、学習ノートの作成をていねいに指導する学校が増えていることが推察できる。学習における手間のかけ方が、変わっているのかもしれない。

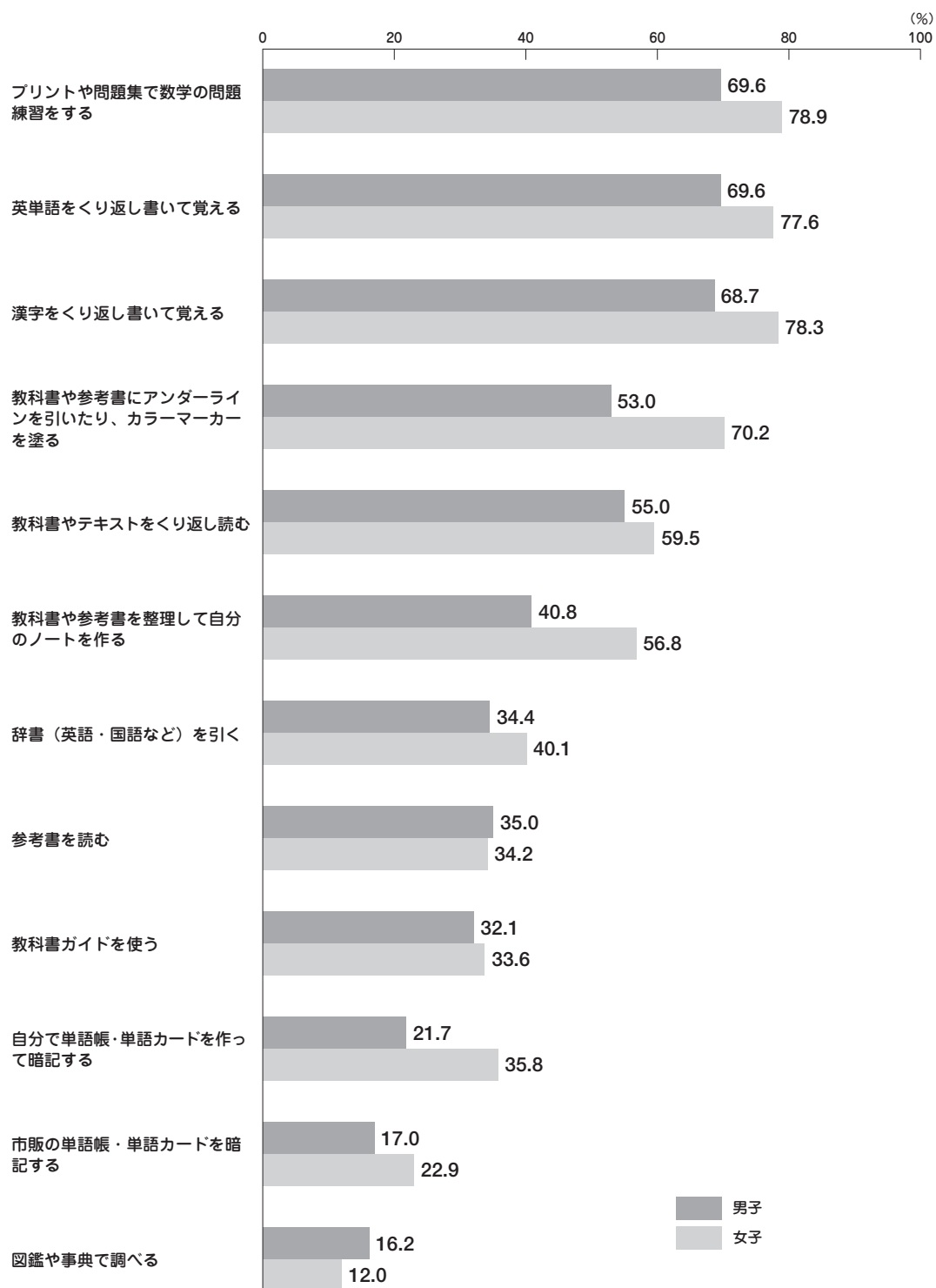
図2-1-22は、学習の方法について性別にみたものである。ここからは、女子がまじめに学習している様子がよくわかる。多くの項目で、男子よりも女子の数値のほうが高いが、「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」(男子53.0%<女子70.2%、以下同)、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」(40.8%<56.8%)、「自分で単語帳・単語カードを作って暗記する」(21.7%<35.8%)は10ポイント以上も異なり、性差が大きい。これ以外にも、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」「英単語をくり返し書いて覚える」「漢字をくり返し書いて覚える」「辞書を引く」「市販の単語帳・単語カードを暗記する」は5ポイント以上女子の比率が高い。女子は、問題練習や反復練習などをよく行っていることがわかる。

図2-1-21 学習の方法（時系列）



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。
 注2) ※は第1回・第2回に該当項目なし。
 注3) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-1-22 学習の方法(性別)



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。
 注2) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。

② 学習方法のタイプ

中学生の学習方法で多いのは、「復習中心」(84.1%)、「問題集中心」(77.1%)、「自分で整理しながら勉強する」(72.6%)などである。第1回から一貫して「毎日こつこつ勉強する」タイプが増えているのが注目される。

Q あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになると思いますか(1か2のどちらか近いほうの番号に○をつけてください)。

どのようなタイプの学習をしているのかを明らかにするために、異なる12対の学習方法を示し、自分のスタイルがどちらに近いかを選んでもらった。図2-1-23は、その結果である。数値は選択された比率を示している。「無回答・不明」がいるために、足しても100%にはならない。

それでは、最初に、今回の調査結果に注目して、どのようなタイプが多いかを確認しよう。

差が大きい順に、①「予習中心」(11.9%)よりも「復習中心」(84.1%)、②「参考書中心」(18.0%)よりも「問題集中心」(77.1%)、③「見て覚える」(22.4%)よりも「書いて覚える」(74.1%)、④「市販の要点整理などを使う」(22.8%)よりも「自分で整理しながら勉強する」(72.6%)、⑤「読んだり、声に出しながら覚える」(24.1%)よりも「書きながら覚える」(71.9%)、⑥「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(29.9%)よりも「学校で使う教材中心」(65.7%)といった結果になっている。学校の教材を使って、復習を中心に、自分で整理しながら勉強するタイプが多いようだ。学習内容を先取りしたり、学校以外の学習を中心にしたりしている中学生は、相対的に少ないことがわかる。

時系列の変化をみると、「問題集中心」(第1回67.3%→第4回77.1%、以下同)、「自分で整理しながら勉強する」(66.9%→72.6%)、

「書きながら覚える」(64.9%→71.9%)など、もともと多いタイプの学習方法がさらに増えている。ただし、1項目だけ、少数派が増加しているものがある。「毎日こつこつ勉強する」(22.6%→33.2%)が10ポイント以上増え、多数派であった「試験の前にまとめて勉強する」(75.2%→62.8%)は減少している。あくまでも自己評価であるが、この項目に象徴されるように、地道に学習をしようという姿勢の中学生が増えているようだ。

さらに、性別で差が大きい項目に限って、図2-1-24にまとめた。これをみると、性別により学習方法のタイプが異なることがよくわかる。男子のほうが女子より多いのは、「見て覚える」「できるだけ考えようとする」「わからないところは、自分で考える」「得意な科目中心」「難しい問題をじっくり考える」である。自分で「考える」という回答が多いのが特徴といえよう。

一方、女子のほうが男子より多いのは、「書いて覚える」「できるだけ暗記しようとする」「わからないところは、先生や友だちに聞く」「苦手な科目中心」「やさしい問題を数多く解く」である。女子は、考えるよりも、苦手な科目中心に、暗記したり、やさしい問題を数多く解いたりして学習することを好んでいる。自分で考えるより、先生や友だちとといったリソースを活用して解決を図ろうとする傾向が強いところも特徴的である。

図2-1-23 学習方法のタイプ(時系列)

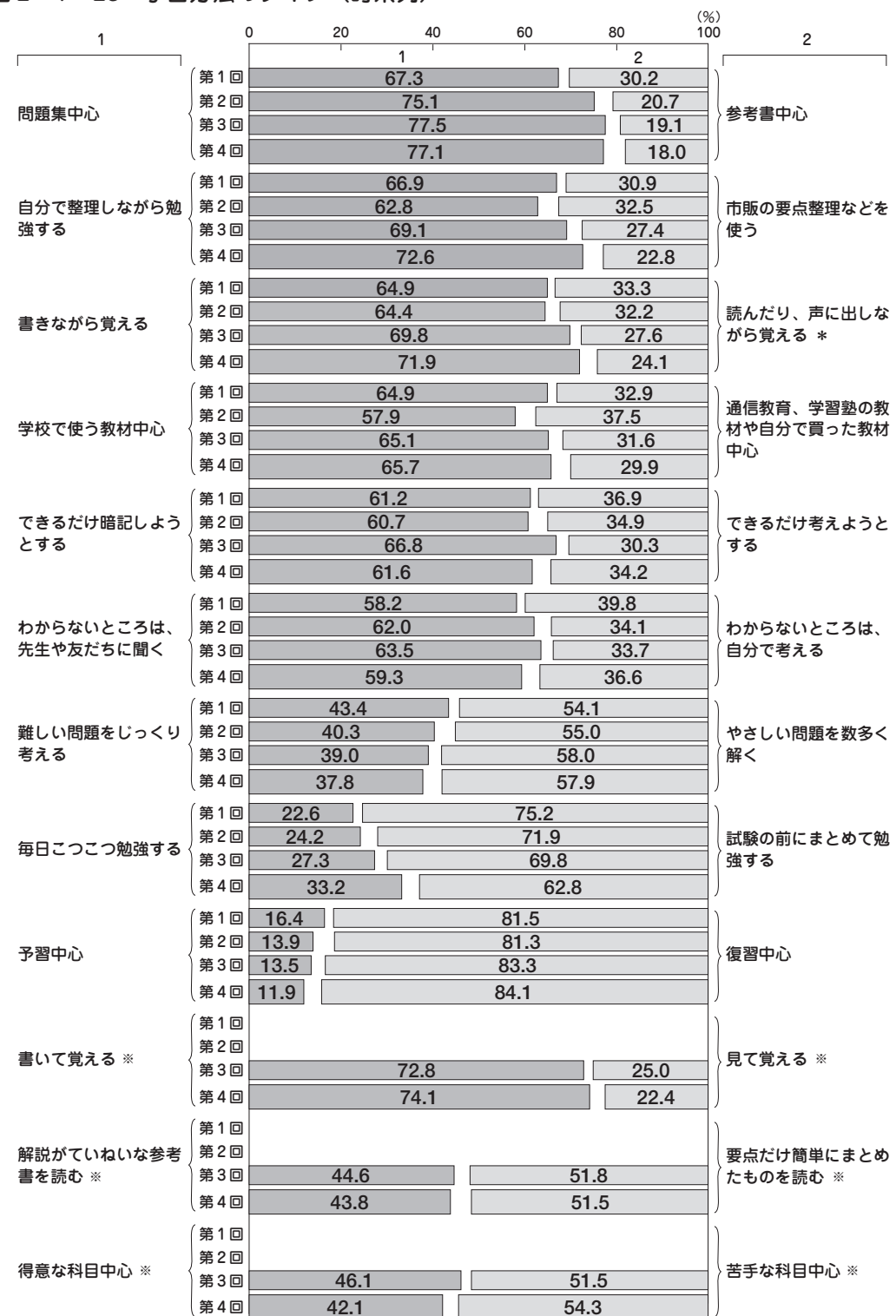
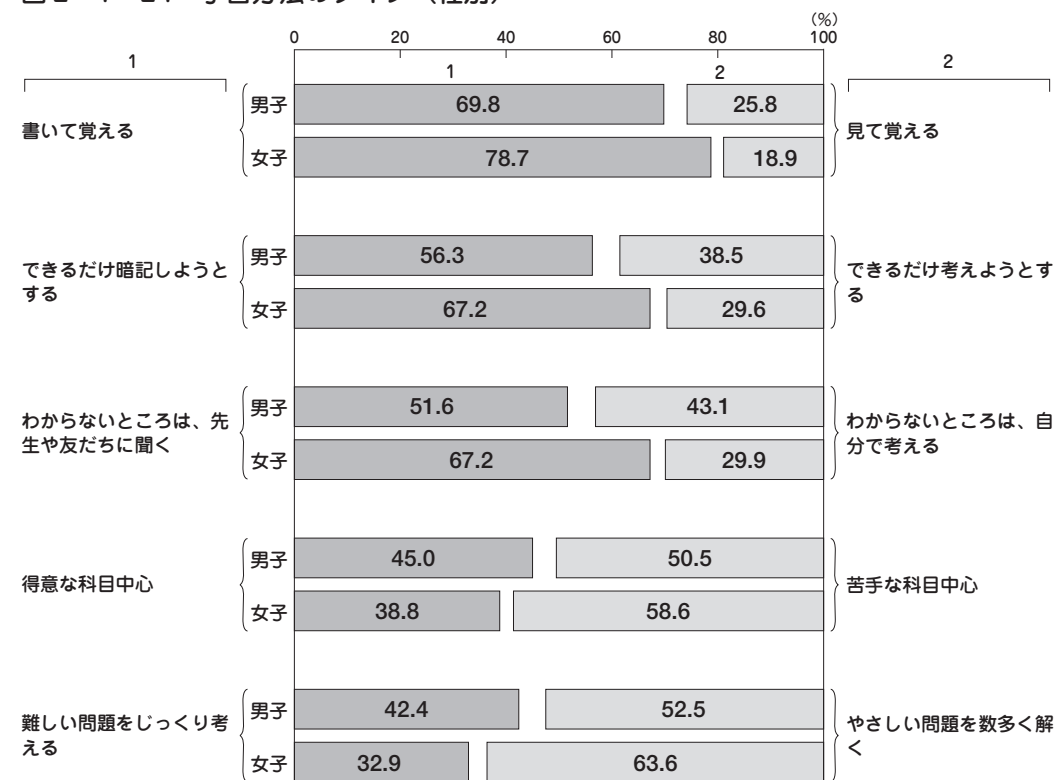


図2-1-24 学習方法のタイプ(性別)



注1) 「1」か「2」のいずれかを選択。数値は選択された比率を示す。「1」「2」の間の空白部分は「無回答・不明」を示す。
 注2) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。

注1) 「1」か「2」のいずれかを選択。数値は選択された比率を示す。「1」「2」の間の空白部分は「無回答・不明」を示す。
 注2) ※は第1回・第2回に該当項目なし。
 注3) ※第1回～第3回は「読んだり、しゃべりながら覚える」。
 注4) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

③ メディアの利用

「家でパソコンを使う」のは68.9%、「学校でパソコンを使う」のは65.4%であり、10年前と比較して大きく増加した。「家でインターネットを使って何か調べる」中学生も、半数を超える。

Q | パソコンやテレビなどのメディア（機械）についてうかがいます。

総務省が行っている『通信利用動向調査(平成17年)』によると、パソコンの保有率(世帯)は、平成9年までは2割台であるが、平成12年に5割に達し、平成17年には8割を超えている。いまや多くの家庭にパソコンがあり、子どもたちもそれに接する機会が増えていることが容易に推察できる。また、文部科学省が行っている『学校における情報教育の実態等に関する調査』によると、「教育用コンピュータ1台あたりの生徒数(中学校)」は、平成12年には10.3人であったが、その5年後の平成17年には6.9人となっている。学校でも、子どもが使えるパソコンの台数が増えている状況がうかがえる。このように、ここ数年で子どもを取り巻くメディアの環境は大きく変わったが、それでは、中学生は実際にどのくらいパソコンに触れているのだろうか。また、それをどの程度、学習に利用しているのだろうか。

本調査では、パソコンを含めたメディアの利用について8項目にわたってたずねた(図2-1-25)。「ある」(「よくある」+「時々ある」)の%、以下同)の比率をみると、「家でパソコンを使う」は第2回では27.4%であったが、第4回では68.9%となっている。この10年で2倍以上に増加していることがわかる。さらに、家庭での利用は頻度が高いことも特

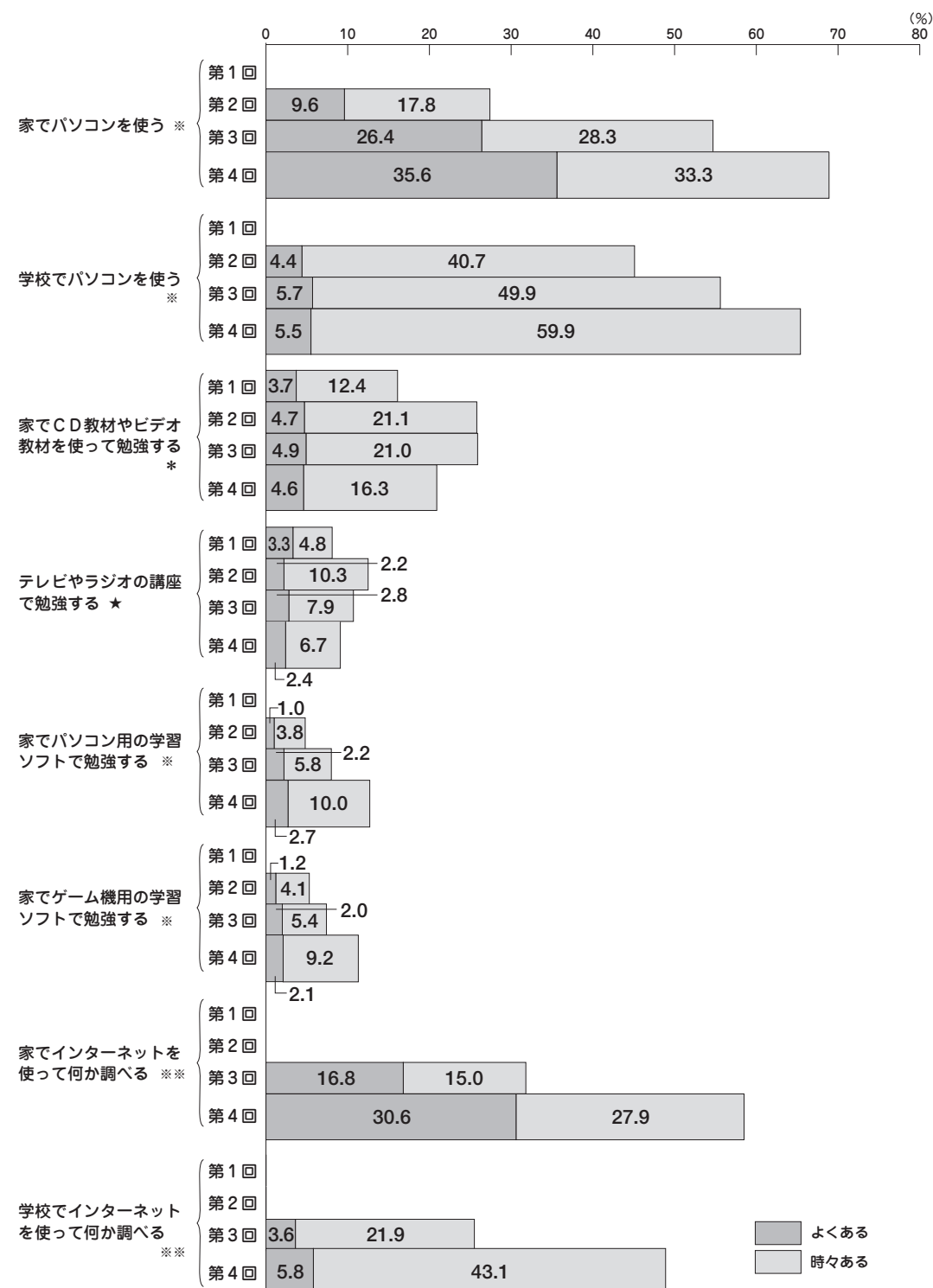
徴であり、35.6%が「よくある」と回答している。

「学校でパソコンを使う」は、第2回ですでに45.1%と比較的高い比率であったが、第4回では65.4%と20ポイント以上増えている。ただし、この数値は、小学生(88.2%)と比べて20ポイント以上低い(『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』参照)。また、「よくある」が少なく、「時々ある」が多い結果となっており、家庭での利用に比べて頻度が低い様子が見える。

「家でCD教材やビデオ教材を使って勉強する」は、第3回の25.9%をピークに減少し、「テレビやラジオの講座で勉強する」も第2回の12.5%をピークに減少している。これに対して、「家でパソコン用の学習ソフトで勉強する」「家でゲーム機用の学習ソフトで勉強する」は、わずかではあるが増加傾向にある。学習に利用する媒体も、少しずつ変化していることがわかる。

「家でインターネットを使って何か調べる」「学校でインターネットを使って何か調べる」の2項目については、第2回まではたずねていないが、第3回と第4回を比較するといずれも比率が大きく伸びている。家庭での利用は58.5%であり、半数以上の中学生がインターネットを使って調べものを行っている。

図2-1-25 メディアの利用(時系列)



注1) ※は第1回に該当項目なし。※※は第1回・第2回に該当項目なし。
 注2) *第1回・第2回は「カセットテープ教材やビデオ教材を使って勉強する」、第3回は「CD教材やビデオ教材を使って勉強する」。
 ★第2回は「テレビやビデオの講座で勉強する」。
 注3) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。